

例 言

- 1 本書は、中央大学文学部考古学研究室調査報告書 2 大日野原遺跡第3次調査報告書（遺構編）である。
- 2 本書は、平成20・21年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤C（代表小林謙一，研究課題番号：19520662）「炭素14年代を利用した縄紋時代の居住期間の研究」、平成22年～23年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤C（代表小林謙一，研究課題番号：22520774）「炭素14年代による縄紋集落の研究」および中央大学共同研究の一環として中央大学でおこなった大日野原遺跡第3次発掘調査による学術調査報告書である。なお、調査は相模原市立博物館との共同調査である。その整理作業は中央大学においておこない、出土資料・記録は中央大学に一時保管している。調査研究が終わった後、相模原市立博物館に移管する予定である。
- 3 遺跡名は大日野原（おびのつばら）遺跡、所在地は神奈川県相模原市緑区澤井748である。
- 4 調査面積は、100.5㎡である。
- 5 発掘調査は以下のようにおこなった。
 発掘調査期間 2008年8月16日～8月30日、2009年8月3日～15日、2010年8月2日～13日、
 2011年7月29日～8月13日
 調査主体 中央大学文学部（文学部長 宇野茂彦（～2009年度）、河西良治（2010年度～））
 調査担当者 小林謙一（中央大学 文学部）
 河本雅人（相模原市立博物館：当時）
- 6 本書は小林謙一が指導し、各担当者が執筆を行い、矢嶋良多が編集を行った。文責は文末に記した。
- 7 整理作業期間は、2008年9月10日～2013年3月31日である。
- 8 発掘調査における基準杭・グリッド設定は、GPSを用いて国土地理院の関東地区IX系の座標に設定した。
- 9 遺物の取り上げおよび遺物分布遺構図作成については、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。
- 10 写真については、小林謙一・河本雅人が撮影した。

凡 例

- ・ 本書の図1で使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行2.5万分の1地形図を複製縮小したものをを使用した。
- ・ 遺構・遺物図版の縮尺は、各々にスケールを付した。
- ・ 土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2001年版による。
- ・ 遺構の呼称については原則として調査時の呼称を用いた。ただし、Pitに関しては整理の際に住居跡の柱穴と確認されたものがあるため、住居名の後にP No.を付した。
- ・ 遺構については基本的に通し番号としたが、PitについてはA区・B区ごとに通し番号を付した。
- ・ 住居の覆土に関しては層の番号の前に所属する住居番号を付して表記した。例) 2-1 SI-02 1層
- ・ 遺構名略号、遺構平面・断面図面の仕様は以下の通りである。その他のドットマップなどの図版に関しては個々に凡例を付した。

| 遺構名略号 | 平面図 表現 | 断面図 表現 |
|----------------|--------|--------|
| | プラン推定線 | |
| SI 住居跡 | SI-01 | 燃焼面 |
| SK 土坑 | SI-03 | |
| SX 不明遺構 | SI-05 | 地山 |
| Pit 住居に伴わないピット | SI-06 | |
| | SI-09 | |

目次

| | |
|---------------------------|----|
| 例言 | |
| 凡例 | |
| 目次 | |
| I. 調査の経緯と遺跡の概要 | 3 |
| (1) 調査の目的と経緯 | 3 |
| (2) 遺跡の立地環境と周辺の遺跡 | 4 |
| (3) 調査の方法と概要 | 7 |
| (4) 基本層序 | 9 |
| II. 検出された遺構 | 9 |
| (1) 各調査区の概要 | 9 |
| (2) 住居跡 | 17 |
| (3) その他の遺構 | 30 |
| 付編 1. 大日野原遺跡出土縄文中期土器の胎土分析 | 32 |
| 報告書抄録 | |
| 写真図版 | |

図目次

| | |
|------|------------------------|
| 図 1 | 大日野原遺跡の位置 |
| 図 2 | 遺跡周辺の地質図 |
| 図 3 | 周辺の遺跡 |
| 図 4 | 第 3 次調査地点の位置および調査区の設定 |
| 図 5 | 攪乱配置図 |
| 図 6 | A・D 調査区遺構配置図 |
| 図 7 | A・D 調査区土層断面 |
| 図 8 | A 調査区出土土器・礫分布 |
| 図 9 | A 調査区出土黒曜石・炭化物・石器分布 |
| 図 10 | A 調査区出土遺物別土層断面分布 |
| 図 11 | B 調査区および土層断面 |
| 図 12 | C 調査区および土層断面 |
| 図 13 | SI-01 住居跡 |
| 図 14 | SK-03・SI-01 床面出土土器 |
| 図 15 | SI-02 住居跡 |
| 図 16 | SI-02 埋壘・2-3 層上面遺物集中地点 |
| 図 17 | SI-03 住居跡 |
| 図 18 | SI-06 住居跡 |
| 図 19 | SI-06 出土遺物分布 |
| 図 20 | SI-06 覆土遺物出土状況 |
| 図 21 | SI-06 炉 |
| 図 22 | SI-08・SI-09 住居跡 |
| 図 23 | SK-04 土坑 |
| 図 24 | A 調査区 Pit-02 |

| | |
|------|---------------------------|
| 図 25 | 分析土器試料 |
| 図 26 | 土器胎土の岩石鉱物組成 |
| 図 27 | 岩石組成折れ線グラフ |
| 図 28 | 土器と関東地域河川砂とのクラスタ分析樹形図 (1) |
| 図 29 | 土器と甲府盆地河川砂とのクラスタ分析樹形図 (2) |

表目次

| | |
|-----|--------------------|
| 表 1 | 発掘調査に係る調整および届出等の文書 |
| 表 2 | 大日野原遺跡周辺の遺跡表 |
| 表 3 | 試料表 |
| 表 4 | 土器胎土中の岩石鉱物 |
| 表 5 | 折れ線グラフによる土器分類 |

I. 調査の経緯と遺跡の概要

(1) 調査の目的と経緯

2007年度より実施していた科学研究費補助金基盤Cの考古学的調査の一端として、相模原市大日野原遺跡の発掘調査を計画した。2008年度は、年代測定研究に適した遺存状態のよい縄紋時代中期竪穴住居の確認を目的として計画した。あわせて中央大学における考古学教育の一環とするために、中央大学文学部を調査主体し、上記科学研究費の研究代表である。中央大学文学部日本史学専攻の小林謙一准教授を調査担当として、文化財保護法92条第1項に基づく発掘調査の届出を7月に行い、受理を受けた。調査は旧津久井郡四町の合併に伴い、津久井地域の遺跡に関する資料収集と調査を行っていた相模原市立博物館と共同で実施することとなり、2008年7月に相模原市教育委員会と中央大学文学部との間で「大日野原遺跡の共同調査に関する協定書」を取り交わした。具体的な調査地点は、旧藤野町が町史編さんのため1987年に調査を行い、古代の住居跡と縄紋時代の遺物包含層が確認されている地点（藤野町1995）とすることとし、地主の遠藤厚子氏の発掘調査承諾書を得た。また、周辺住民・農地所有者、相模原市教育委員会藤野教育課（当時）、藤野中央公民館の協力を得た。

大日野原遺跡における過去の調査は、1953年の立川市立高等学校（現東京都立北多摩高等学校）によるものが最初とされ（第1次調査）、本調査地の北西約50m付近で加曽利E式期の竪穴住居跡が検出されているが、調査の詳細については不明である（藤野町文化財保護委員会編1978）。

1987年には、藤野町教育委員会が主催する調査団が、本調査地において幅1.6m、長さ58mのトレンチ調査を実施し（第2次調査）、平安時代の竪穴住居跡3基のほか（1基は遺構確認面での確認のみ）、縄紋時代中期中葉から後期初頭の遺物を検出している（滝澤ほか1988）。なお、第2次調査のトレンチと推定される痕跡が本報告のBトレンチにおいて確認されている。

（小林謙一・河本雅人）

表1 発掘調査に係る調整および届出等の文書

| 文書種別・内容 | 文書番号 | 日付 | 発信者 | 受信者 | 備考 |
|--------------------------|------------|------------|-----------------------------|-----------------------------|--------|
| 1. 文化財保護法第92条に基づく発掘調査の届出 | | | | | |
| 発掘調査の届出（20年度） | | 平成20年7月9日 | 中央大学文学部長 | 神奈川県教育委員会教育長 | 相模原市経由 |
| 発掘調査の届出に対する指示通知 | 生文20第5-41号 | 平成20年8月28日 | 神奈川県教育委員会教育長 | 中央大学文学部長 | 相模原市経由 |
| 発掘調査の届出（21年度） | | 平成21年6月29日 | 中央大学文学部長 | 神奈川県教育委員会教育長 | 相模原市経由 |
| 発掘調査の届出に対する指示通知 | 生文21第5-40号 | 平成21年7月27日 | 神奈川県教育委員会教育長 | 中央大学文学部長 | 相模原市経由 |
| 発掘調査の届出（22年度） | | 平成22年6月24日 | 中央大学文学部長 | 神奈川県教育委員会教育長 | 相模原市経由 |
| 発掘調査の届出に対する指示通知 | 文遺50031号 | 平成22年7月16日 | 神奈川県教育委員会教育長 | 中央大学文学部長 | 相模原市経由 |
| 発掘調査の届出（23年度） | | 平成23年6月16日 | 中央大学文学部長 日本史学研究室 小林謙一 | 神奈川県教育委員会教育長 | 相模原市経由 |
| 発掘調査の届出に対する指示通知 | 文遺50041号 | 平成23年8月4日 | 神奈川県教育委員会教育長 | 中央大学文学部長 日本史学研究室 小林謙一 | 相模原市経由 |
| 2. 出土品の手続き | | | | | |
| 埋蔵物の発見届 | | 平成21年9月7日 | 文学部小林謙一 | 相模原警察署 | |
| | 第2572号 | 平成22年8月20日 | 文学部小林謙一 | 相模原警察署 | |
| | 第2652号 | 平成23年8月22日 | 中央大学日本史学研究室 | 相模原警察署 | |
| 出土文化財保管証 | | 平成21年8月24日 | 中央大学文学部長 | 神奈川県教育委員会教育長 | |
| | | 平成23年8月29日 | 中央大学文学部長 | 神奈川県教育委員会教育長 | |

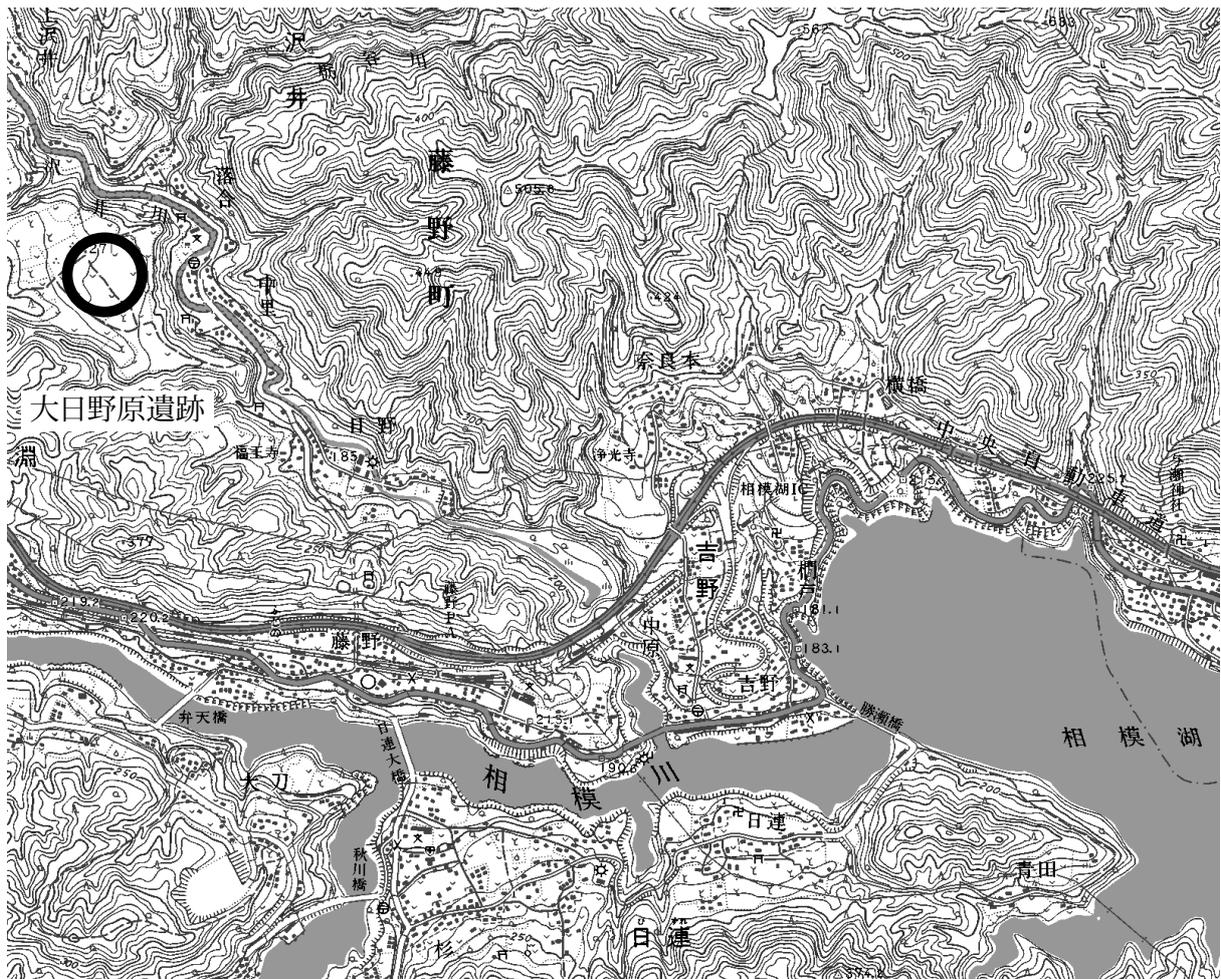


図1 大日野原遺跡の位置(S=1/25000)

(2) 遺跡の立地環境と周辺の遺跡

大日野原遺跡は相模原市緑区澤井に所在し、JR中央本線藤野駅から北約1.5kmに位置する(図1)。遺跡の北東側に県道522号桐原藤野(ゆずりはらふじの)線が走り、また県道に沿って沢井川が流れている。沢井川は、陣馬山の北方和田峠の西にその源を発し、その流路を大きく西から南東へ湾曲させながらくんだり、陣馬山の南から発する栃谷川と本遺跡付近で合流する。本遺跡は関東山地中南部東端に流れる沢井川右岸の山間部で、標高約250mから約280mという標高差30mのうちに20haの面積が収まる広大な舌状台地上にある。現在は畑や果樹園等が営まれており、直下を流れる沢井川との標高差は約70mである。

本遺跡及び周辺の地質は、古伊豆-小笠原弧の一部をなす新第三系と境を接する関東山地南部の四万十帯(白亜紀・古第三期)の南縁にあたる(河尻2012)(図2)。当遺跡の所在地は従前、四万十帯の小仏層(白亜紀)と考えられていた(神奈川県教育委員会1980)が、後の調査により小仏層ではなく、同じ四万十帯の古第三期・相模湖層群上であるとされている(酒井1987)。さらに相模湖層群のなかでも権現山層に所在し、同じ相模湖層群の瀬戸層と接する位置にある(酒井1987、河尻2012)。なお、権現山層は主に塊状砂岩、礫岩、頁岩等からなる。また、瀬戸層は主に頁岩からなり、その一部は千枚岩質である(酒井1987、河尻2012)。

本遺跡は関東山地を横切る八王子-甲府間の国道20号線・甲州街道の北側約1.5kmに位置している。甲州街道(道中)は近世に整備されたが、その歴史は古く、例えば、相模原市中央区田名に位置する国指定史跡田名向原遺跡から出土した黒曜石の多くが長野県和田峠、麦草峠産であったことなどから、関東平野と甲州盆地・中部山岳地帯には旧石器時代から往来があったことが示されている(相模原市教育委員会2003)。これらのルートは現在の笹子川・桂川・相模川に沿った往来と考えるのが自然であり、本遺跡が属する縄文時代中期においても、遺跡の南方に活発な往来があったことは容易に想定できる。

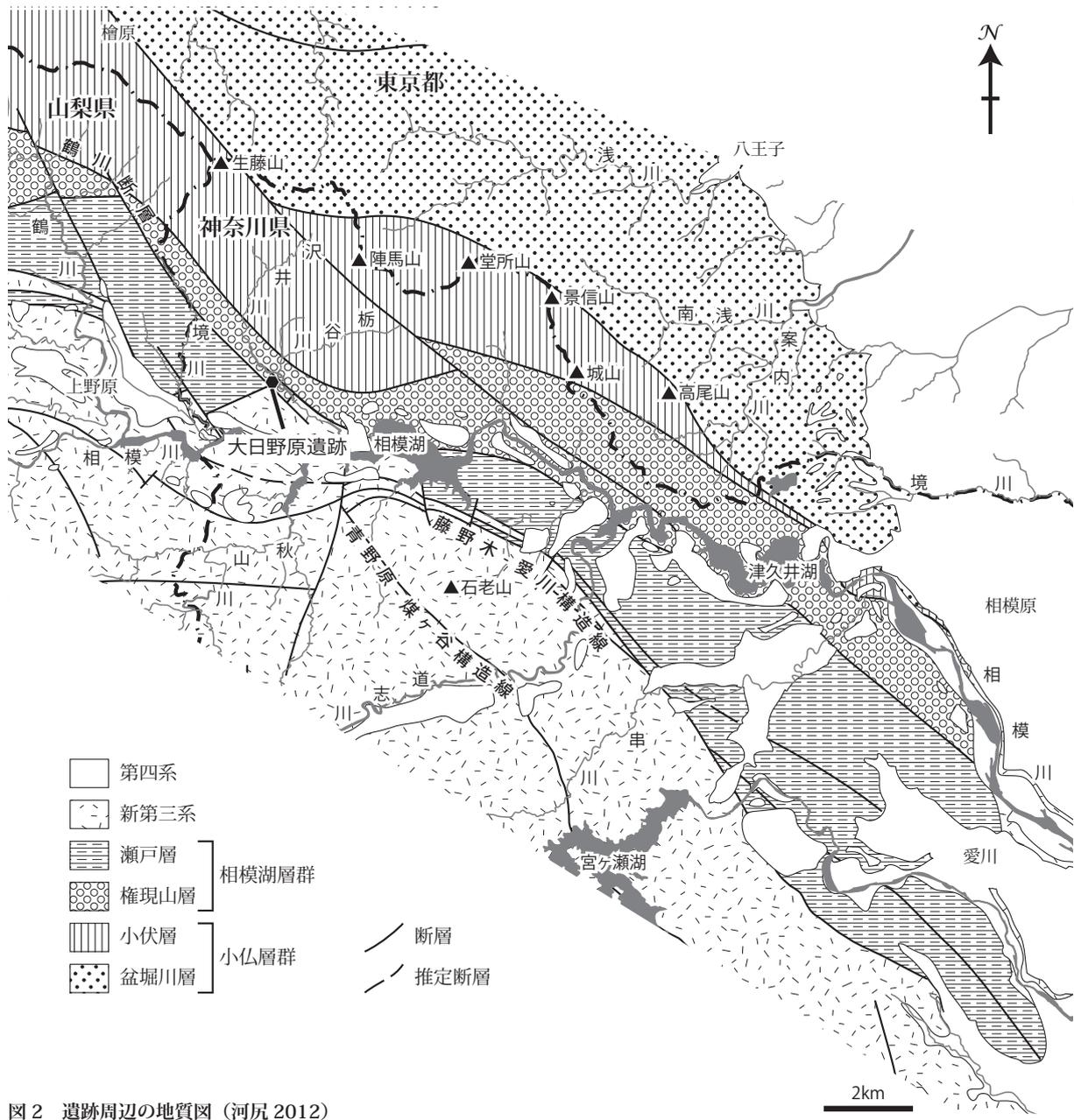


図2 遺跡周辺の地質図(河尻 2012)

図3は神奈川県教育委員会作成「平成24年神奈川県遺跡台帳」(平成23年12月31日現在)を元に、大日野原遺跡周辺に分布する遺跡について作図したものである。また表2はその一覧である。ここでは図示できた本遺跡周辺に分布する各遺跡を時代ごとに概観する。なお、相模湖は1947年に完成した相模ダムによって形成されており、水没前の相模川沿岸にも多数の遺跡が存在していた可能性が極めて高いということをあらかじめ述べておく。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡として周知されている遺跡は、増原(神奈川県遺跡台帳ナンバー409:以下同じ)遺跡、429遺跡である。増原遺跡からは尖頭器5点をはじめ石器類計31点が採取されている。また、429遺跡からは2点の剥片が出土している。

縄文時代 縄文時代の遺跡は集落跡である寸沢嵐(407)遺跡、内郷中学校内(408)遺跡、寸嵐一号(412)遺跡、寺井(425)遺跡、嵯峨(491)遺跡の他、多数の散布地が確認されている。寸沢嵐遺跡からは中期末の敷石住居跡が確認され、昭和5年に国の指定史跡となっている。内郷中学校内遺跡と寸沢嵐一号遺跡は中期中葉から後期前葉の所産である。寺井遺跡からは後期前葉の2軒の敷石住居跡が確認されている。嵯峨(491)遺跡からは中期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡12軒が確認されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡は極めて少ない。本遺跡の周囲では鼠坂(436)遺跡(ダム建設により水没)から小型の鉢が出土したほかは小片が採取されているだけであり、図示できた範囲に集落跡は確認されておらず、調査事例もない。

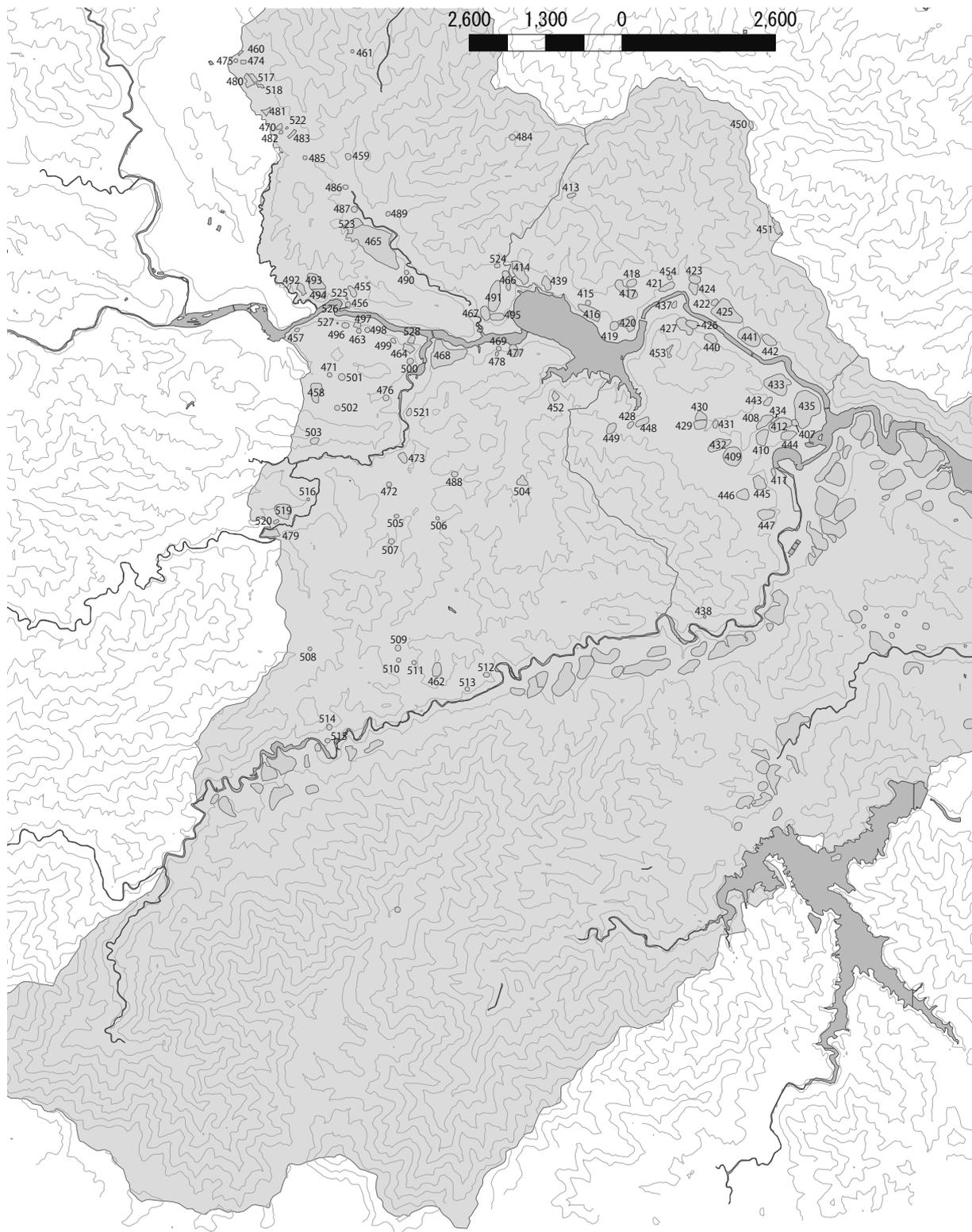


図3 周辺の遺跡

古墳時代 古墳時代の遺跡も少ない。図3の範囲で古墳時代として周知されている遺跡は10箇所に足らず、いずれも散布地である。これまで土師器片の採集は何点かなされているが、集落跡は確認されておらず、発掘調査事例もない。

奈良～平安時代 奈良時代の遺跡は少ないが、平安時代に入ると遺跡の数が急増する。とりわけ10世紀に入ると多くの集落が営まれる。本遺跡(465)においても平安時代の集落が確認されている。このほか嵯峨(491)遺跡、下小淵(493)遺跡、篠原大割目(504)遺跡などで平安時代の集落が確認されている。

(正 洋樹)

表2 大日野原遺跡周辺の遺跡表

| 遺跡 台帳 No | 種別 | 遺跡名 | 時代 |
|----------------|--------------|--------------|-------------|
| 407 | 集落跡 | 寸沢嵐遺跡 | 縄紋 |
| 408 | 集落跡 | 内郷中学校内遺跡 | 縄紋 |
| 409 | 散布地 | 増原遺跡 | 旧石器、縄紋、平安 |
| 410 | 散布地 | | 縄紋、弥生 |
| 411 | 散布地 | | |
| 412 | 集落跡 | 寸嵐一号遺跡 | 縄紋、弥生 |
| 413 | | | 縄紋 |
| 414 | 散布地 | | 縄紋、平安 |
| 415 | 散布地 | | 縄紋 |
| 416 | 散布地 | | 縄紋、平安 |
| 417 | 散布地 | 中野遺跡 | 縄紋、平安 |
| 418 | 散布地 | | 縄紋 |
| 419 | 散布地 | | 縄紋 |
| 420 | 散布地 | | 縄紋、平安 |
| 421 | 散布地 | | 縄紋 |
| 422 | 散布地 | | 縄紋 |
| 423 | 散布地 | | 縄紋 |
| 424 | 散布地 | | 縄紋 |
| 425 | 集落跡 | 寺井遺跡 | 縄紋、奈良～平安、中世 |
| 426 | 散布地 | | 縄紋 |
| 427 | 散布地 | | 縄紋 |
| 428 | 散布地 | | 縄紋 |
| 429 | 散布地 | | 旧石器、縄紋 |
| 430 | 散布地 | | 縄紋、平安、中世 |
| 431 | 散布地 | | 縄紋 |
| 432 | 散布地 | | 縄紋 |
| 433 | 散布地 | 宝福寺周辺遺跡 | 縄紋、奈良～平安、中世 |
| 434 | 散布地 | | 縄紋 |
| 435 | 散布地 | | 縄紋、古墳 |
| 436 | 散布地 | 鼠坂遺跡 | 弥生 |
| 437 | 散布地 | | |
| 438 | 生産遺跡 (窯跡) | | 近世 |
| 439 | 散布地 | | 縄紋 |
| 440 | 散布地 | | 縄紋、平安 |
| 441 | 散布地 | | 縄紋、平安 |
| 442 | 散布地 | | 縄紋、奈良～平安 |
| 443 | 散布地 | | 平安 |
| 444 | 散布地 | | 縄紋 |
| 445 | 散布地 | | 縄紋、古墳 |
| 446 | 散布地 | | 縄紋 |
| 447 | 散布地 | | 縄紋、古代 |
| 448 | 散布地 | | 縄紋、奈良～平安 |
| 449 | 散布地 | | 縄紋、平安 |
| 450 | その他の遺跡(狼煙台跡) | | 中世 |
| 451 | 城館跡(砦) | | 中世 |
| 452 | その他の遺跡(狼煙台跡) | | 中世 |
| 453 | その他の遺跡(狼煙台跡) | | 中世 |
| 454 | 屋敷跡 | 小原宿本陣屋敷跡 | 近世 |
| 455 | 散布地 | 関野増珠寺遺跡 | 縄紋、古墳 |
| 456 | 散布地 | 関野道下遺跡 | 縄紋、奈良～平安 |
| 457 | 散布地 | 漆久保遺跡 | 縄紋 |
| 458 | 散布地 | 向原遺跡 | 縄紋 |
| 459 | 散布地 | | 縄紋 |
| 460 | 散布地 | 夜追遺跡 | 縄紋 |
| 461 | 館跡 | 佐野川館跡 | 戦国末期 |
| 462 | 城跡 | 牧野城跡 | 戦国末期 |
| 463 | 散布地 | 中村原遺跡 | 縄紋、弥生、奈良～平安 |
| 464 | 散布地 | | 縄紋 |
| 465 | 集落跡 | 大日野原遺跡 | 縄紋、奈良～平安 |
| 466 | 散布地 | 天奈遺跡 | 縄紋 |
| 467 | 散布地 | 吉野中原遺跡 | 縄紋 |
| 468 | 散布地 | 杉遺跡 | 縄紋、弥生、奈良～平安 |
| 469 | 散布地 | | 縄紋、奈良～平安 |
| 470 | 散布地 | 下岩遺跡 | 縄紋 |
| 471 | 散布地 | | |
| 472 | 散布地 | 殿池遺跡 | 縄紋、歴史時代 |
| 473 | 散布地 | 馬本遺跡 | 縄紋、歴史時代、中世 |
| 474 | 散布地 | 上岩遺跡C地点 | 縄紋 |
| 475 | 散布地 | 上岩遺跡B地点 | 縄紋 |
| 476 | 散布地 | 芝田遺跡 | 縄紋、奈良～平安 |
| 477 | 散布地 | 日連遺跡 | 縄紋、歴史時代 |
| 478 | 散布地 | 日連遺跡 | 縄紋 |
| 479 | 砦跡 | 城山遺跡 | 歴史時代、中世 |
| 480 | 散布地 | 上岩遺跡A地点 | 縄紋 |
| 481 | 散布地 | 御霊遺跡 | 縄紋 |
| 482 | 散布地 | | 縄紋 |
| 483 | 散布地 | 下岩B地点遺跡 | 縄紋 |
| 484 | 散布地 | 千馬遺跡 | 縄紋 |
| 485 | 散布地 | 下岩A地点遺跡 | 縄紋 |
| 486 | 散布地 | 大畑遺跡 | 縄紋 |
| 487 | 散布地 | 喜佐蔵原遺跡 | 縄紋 |
| 488 | 散布地 | | 縄紋 |
| 489 | 散布地 | 一の尾原遺跡 | 縄紋 |
| 490 | 散布地 | 曾根遺跡 | 縄紋、弥生 |
| 491 | 集落跡 | 嵯峨遺跡(柵戸中原遺跡) | 縄紋、弥生、奈良～平安 |
| 492 | 散布地 | 上小淵遺跡 | 縄紋、古墳 |
| 493 | 散布地 | 下小淵遺跡 | 縄紋、古墳 |
| 494 | 散布地 | 下小淵下遺跡 | 縄紋、古墳、歴史時代 |
| 495 | 散布地 | 塚原遺跡 | 縄紋、平安 |
| 496 | 散布地 | 鳥居原遺跡 | 縄紋 |
| 497 | 散布地 | 中村原遺跡 | 縄紋、弥生、古墳 |
| 498 | 散布地 | 上層敷遺跡 | 縄紋、古墳 |
| 499 | 散布地 | 開戸原遺跡 | 縄紋 |
| 500 | 散布地 | 小花井遺跡 | 縄紋 |
| 501 | 散布地 | 向原遺跡 | 縄紋 |
| 502 | 散布地 | 葛原遺跡 | 縄紋 |
| 503 | 散布地 | 日向遺跡 | 縄紋 |
| 504 | 散布地 | 篠原大割目遺跡 | 縄紋 |
| 505 | 散布地 | 中尾小尾谷戸遺跡 | 縄紋 |
| 506 | 散布地 | 中尾皆窪遺跡 | 縄紋 |
| 507 | 散布地 | 大久和戸丸遺跡 | 縄紋 |
| 508 | 散布地 | 綱子天皇山遺跡 | 古墳 |
| 509 | 散布地 | 菅井I遺跡 | 縄紋、奈良～平安 |
| 510 | 散布地 | 菅井II遺跡 | 縄紋 |
| 511 | 散布地 | 菅井尾崎原遺跡 | 縄紋、古墳 |
| 512 | 散布地 | 伏馬田茅ノ木遺跡 | 縄紋 |
| 513 | 散布地 | 伏馬田道下遺跡 | 縄紋、弥生、古墳 |
| 514 | 散布地 | 長又上開戸遺跡 | 縄紋 |
| 515 | 散布地 | 長又下平遺跡 | 縄紋 |
| 516 | 近世墓 | 間和瀬遺跡 | 近世 |
| 517 | 散布地 | | 縄紋 |
| 518 | 散布地 | | 縄紋 |
| 519 | 散布地 | | 縄紋、奈良～平安 |
| 520 | 散布地 | | 歴史時代? |
| 521 | 散布地 | | 歴史時代、近世 |
| 522 | 散布地 | | 縄紋 |
| 523 | 散布地 | 小日野遺跡 | 縄紋、奈良～平安 |
| 524 | 散布地 | | 縄紋 |
| 525 | 散布地 | | 縄紋 |
| 526 | 塚 | | |
| 527 | 経塚 | | |
| 528 | 散布地 | | 縄紋、歴史時代 |

(3) 調査の方法と概要

2008年度調査では、地区割に合わせておおよそ南北方向のトレンチを設定した。トレンチは長さ約5m、幅1mとしてA～Cの3本を7mの間隔で設定し、掘り下げた。Cトレンチは近代以降の掘込みが確認され、縄紋時代後期の土器片などが出土したものの、住居の存在は認められなかったため、断面図作成後、埋め戻した。Bトレンチは古代と推定されるピットの他、縄紋時代と考えられる住居のプランを検出したので、北側に拡張し、竪穴住居プランの一部を確認した(SI-04住居)。Aトレンチ南端および北拡張区北端にローム漸移層の地山が確認され、東側拡張区では近代以降の攪乱孔が検出されたため、範囲は確認できなかったが、東側に近接するの現代の重機による植栽用の坑(カクラン坑)の壁面で住居覆土が観察されたため、全面に住居プランが存在することが確認された。A区ではSI-01～03の3軒の住居を検出した。

2009年度は発掘面積を広げ、住居跡の確認を行った。2009年度調査では、昨年度の調査成果をふまえて、SI-01住居床全面を検出するべく、Aトレンチ周辺に西拡張区と南拡張区を新たに設定し、加えて、北拡張区と東拡張区をさらに拡張した。さ

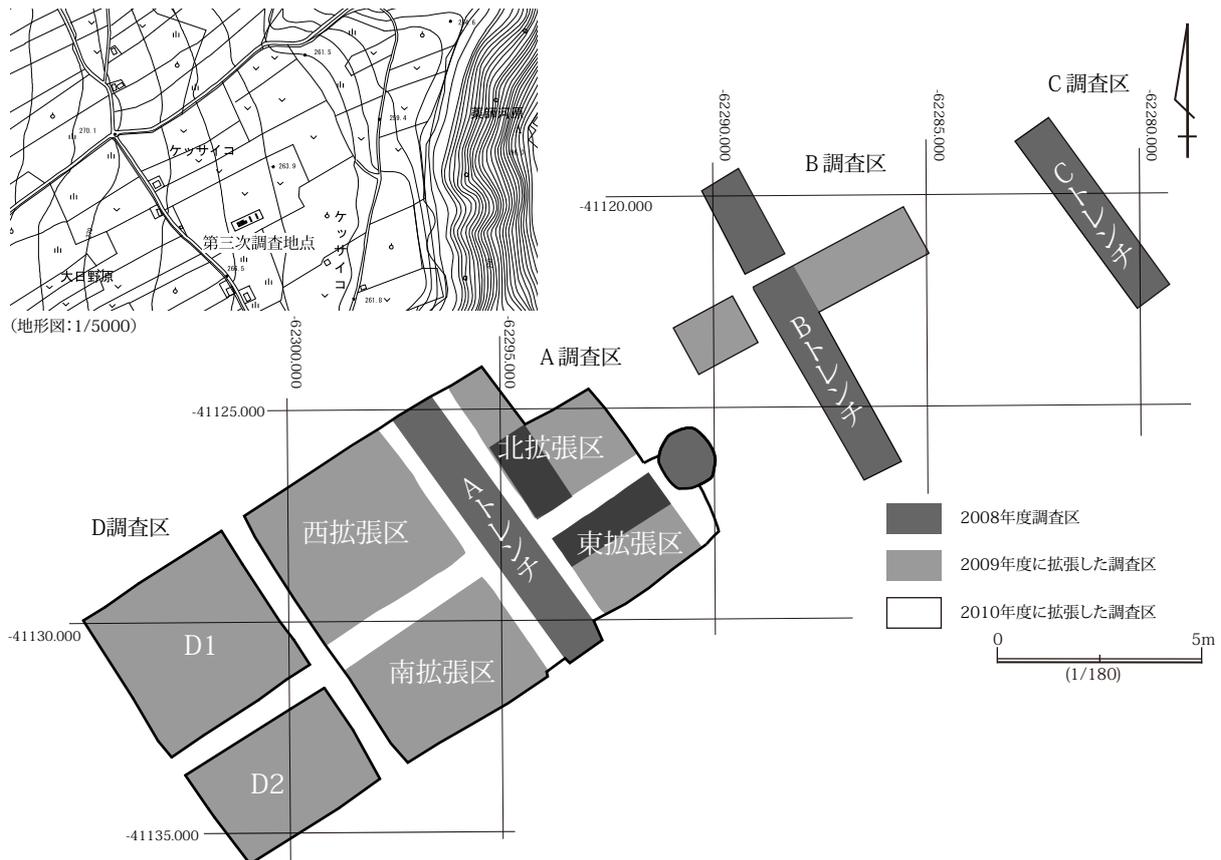


図4 第3次調査地点の位置および調査区の設定

らにBトレンチの内容を明らかにするため、こちらにも拡張区を2つ設定し、調査面積は59.1㎡となった。Bトレンチ東拡張区および西拡張区からは1987年の旧藤野町教育委員会による発掘調査時(第2次調査)のトレンチ跡が検出された。Aトレンチ西拡張区からもこのトレンチ跡が検出された。Aトレンチおよびその拡張区からは、SI-01,02,03住居に加え、新たにSI-05,06住居が確認された(SI-04住居はBトレンチ)。

2010年度の調査では、SI-01,02,03,06住居のプランの確定と各住居跡の新旧関係把握のため、Aトレンチおよび北・東拡張区のベルト部分の掘り下げを中心にA調査区全体の確認をおこなった。また、2009年度の調査で確認されたSI-05住居の範囲を確認するべく、A調査区南西側にD1・D2調査区を新たに設定した。

2011年度はB調査区については昨年度調査区の確認にとどめ、新たに掘り下げなかった。SI-02住居の完掘を目標として主な調査対象としたA調査区については、層位確認用のベルト部分などを勘案して80㎡の範囲を発掘対象とした。結果的には、SI-03の炉が壁にかかっていたため、炉の全体を把握し炉体土器を取りあげる目的でSI-03東北側を調査区に沿って約1m拡張したため、83㎡について遺構確認面まで掘り下げた。主に住居の重複関係が明確であるSI-01,02,03住居の調査を行い、昨年度までに調査したSI-06住居などとあわせて9軒の竪穴住居の存在を確認した。(小林謙一)

調査参加者(順不同、敬称略・所属は当時)

小林謙一、永田悠記、尾村幸子、藤本大祐、山中菜生、佐藤史、丸山聡子、高橋理史、山本卓弥、八木澤美帆、森雅樹、鈴木理恵、白井祐介、磯貝初、矢嶋良多、小澤政彦、岡野公彦、新井翔太、佐藤優、大西勝晶、浅野美幸、滝島あずみ、白畑里沙、下村冨香、大塚亮、土井友、太田立、今泉沙希、田中悠衣、植田聡、野中大亮、高桑佑輔、高見優一、松山功祐、村木朱門、池上拓摩、山田英就、中西樹生、新内谷早紀、市村美由紀、岩崎明日香、関根崇、小倉達也、野村敬宗、吉田廉、妹尾崇、尾林亮一、坂井聡一郎、大作祐太郎、大谷亮介、太田芳樹、米丸広樹、岡本一希、田村麻梨菜、白石桃子、中間春香(中央大学・大学院)、河本雅人(相模原市博物館)、渡辺淳子(早稲田大学)、中村貴大、小川淳平(立正大学)、荒井基喬、市川憲子、鹿山茂樹、神垣真理子、千葉宗嗣、西本志保子、守屋之栄、三嶋最都子、村上金四郎、和家洋壽、樽林亨、塩原譲、今野さおり(以上相模原市立博物館ボランティア)、大網信良、小島信太郎(早稲田大学)、千葉毅、納美保子、香村匠子(慶応大学・大学院)、味噌井拓志、大島由衣、山崎し央倫、杉本智子、犬飼はな江、脇田大輔(三重大学)、平野哲也、高橋智也(國學院大学院)、橋本望(首

都大学東京大学院)、小野寺純也(立正大学)、小林尚子(セツルメント研究会)、宮田公佳(国立歴史民俗博物館)、島地慧、小川翔(中央大学大学院)

調査協力者・機関等(順不同、敬称略・所属は当時)

長友恒人、奈良教育大学学生(小野間、長井、小島)、工藤雄一郎(国立歴史民俗博物館)、大内千年(千葉県文化センター)、黒尾和久(前原遺跡調査会)、武川夏樹(栃木県教育委員会)、瀬藤茂(見晴台考古館)、合田恵美子(栃木県埋蔵文化財センター)、橋本真紀夫、矢作健二、石岡智武((株)パリオ・サーヴェイ)、遠部慎、村本周三、高橋健、内田洋隆、井出靖夫、武田浩司(目黒区教育委員会)、中山真治(府中市教育委員会)、宇佐美哲也(狛江市教育委員会)、稲野裕介(三田史学会)、有村由美(調布市遺跡調査会)、山口欧志、中澤寛将(中央大学大学院)、根兵皇平、大貫英明、佐藤暁、中川真人、領家玲美、江川真澄(相模原市教育委員会)、副島和明(川崎市民ミュージアム)、門倉睦男(藤野中央公民館長)、坂庭京(藤野中央公民館)、森川哲郎(沢井公民館長)、谷古宇和也(相模原市立総合学習センター)、大村裕、建石徹、納美保子(下総考古学研究会)、山本典幸(國學院大學)、五十嵐睦(平塚市教育委員会)、今泉克己(有明文化財研究所)、調布市教育委員会、相模原市教育委員会、遠藤厚子(地権者)、桐花園

(4) 基本層序

基本層序は、AトレンチにおいてⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層を確認した。地山を含めた基本層序を確認するため、Bトレンチ南東側に1m幅の範囲で深さ2mまで深掘りを行い、層序を確認した(図11)。

Ⅰ層:10YR3/2(黒褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ロームブロック径3~4mm 30%・下部に直径12cmのロームブロックがある
Ⅱ層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・ローム粒径5mm 3%・焼土1%
Ⅱ'層:ややボソボソ・Ⅱ層に似るがより柔い
Ⅲ層:10YR3/2(黒褐色)・粘性大・しまり大・固い・ロームブロック径2~3mm 2%
Ⅲ'層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや柔い・黄スコリア径2~3mm 4%・炭化物径1~3mm 1%
Ⅳ層:10YR3/2(黒褐色)・粘性大・しまり大・固い・ロームブロック径1cm 5%
Ⅴ層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒径2mm 3%
L1S:10YR4/6(明褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・赤色スコリア(青柳スコリア)径2~5mm 3%・黄色スコリア径2~3mm 16%
BO:7.5YR5/6(明褐色)・粘性大・しまり大・固い・ソフトローム・赤色スコリア(青柳スコリア)径3~5mm 2%・黄色スコリア径2~6mm 25%
L1H-U:7.5YR 6/6(黄褐色)・粘性やや大・しまりやや大・固い・ハードローム・赤色スコリア径1~2mm 1%・黄色スコリア径2~5mm 30%
L1H-L:7.5YR5/6(黄褐色)(やや赤い)・粘性やや大・しまり大・ごく固い・ハードローム・赤色スコリア径3~5mm 4%・黄色スコリア径3~10mm 30%

(小林謙一)

Ⅱ. 検出された遺構

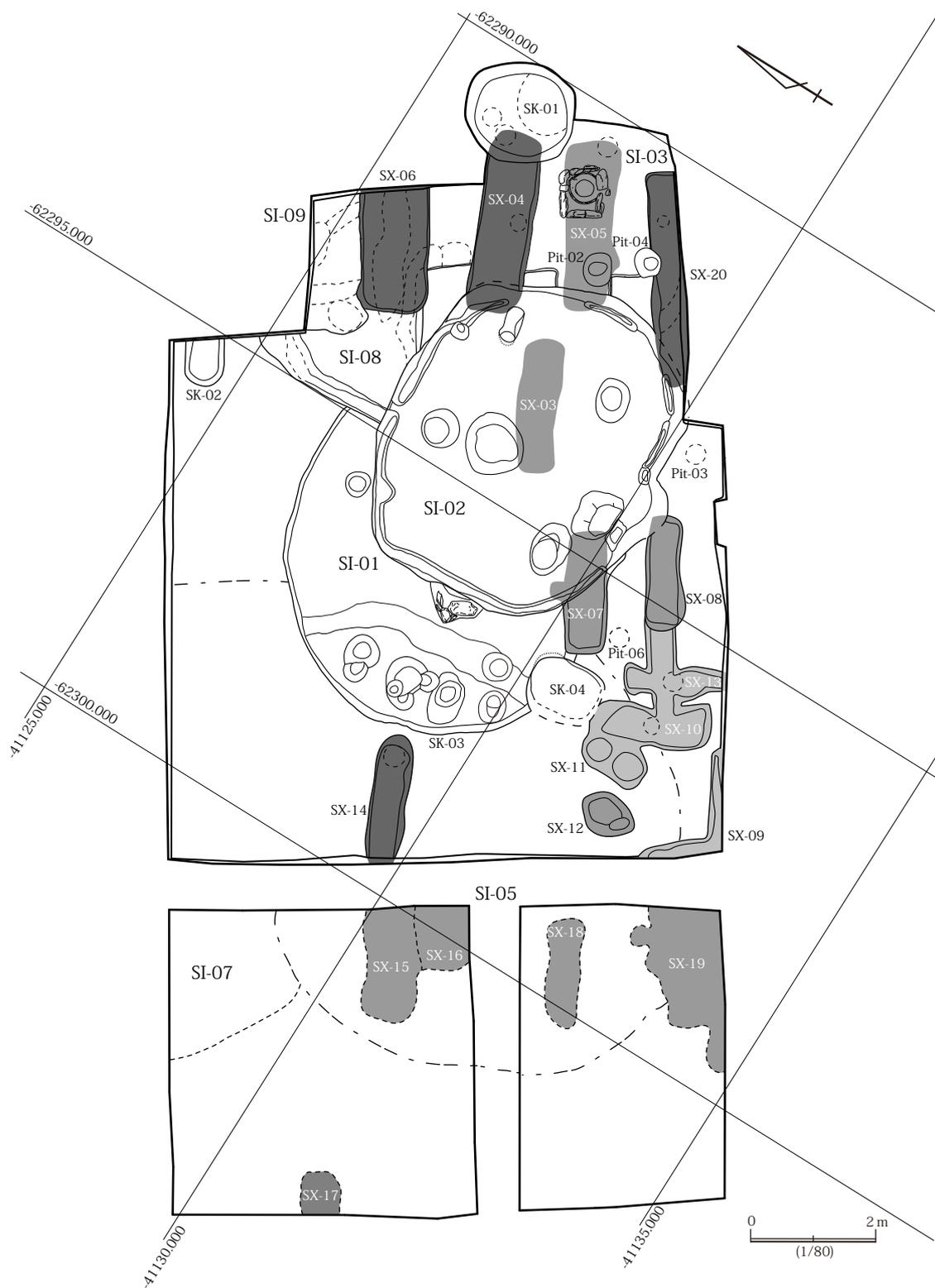
(1) 各調査区の概要

第3次調査地点では縄紋時代の竪穴住居9軒、土坑5基、古代のピット4基、近代以降の耕作痕多数が検出された。各調査区における概要およびプラン確認のみおこなった遺構の説明については以下の通りである。

A・D調査区(図5~10)

A・D調査区では、SXとした耕作に伴う掘込みなどの存在が、縄紋時代の包含層および遺構覆土に影響を与えているため、近代以降の掘り込み(カクラン)の範囲を掲載した。SXはどれも北東方向に伸びた形状をしており、近代以降の耕作痕と思われる。Aトレンチ北東部および南部に多く密集し、中でもSX-04,06,20は掘込みがハードローム層まで達しており、SI-03住居をはじめプランの確認および重複関係の把握に困難を極めた(図5)。

A調査区住居について A区ではSI-01,02,03,06,08,09の6軒の住居及び、D区にかけてSI-05,07の住居の存在が確認されている。「加曽利E3面」想定住居(宇佐美1998、2009)と考えられるSI-06住居については、炉の確認により存在が認めら



| | | | | | |
|---|-------------------|---|--------------------|---|------------------|
|  | Ⅲ・Ⅳ層に達する 後世の遺構 |  | 住居覆土を 破壊する後世の遺構 |  | 住居床面に及ぶ 後世の遺構 |
|---|-------------------|---|--------------------|---|------------------|

図5 攪乱配置図

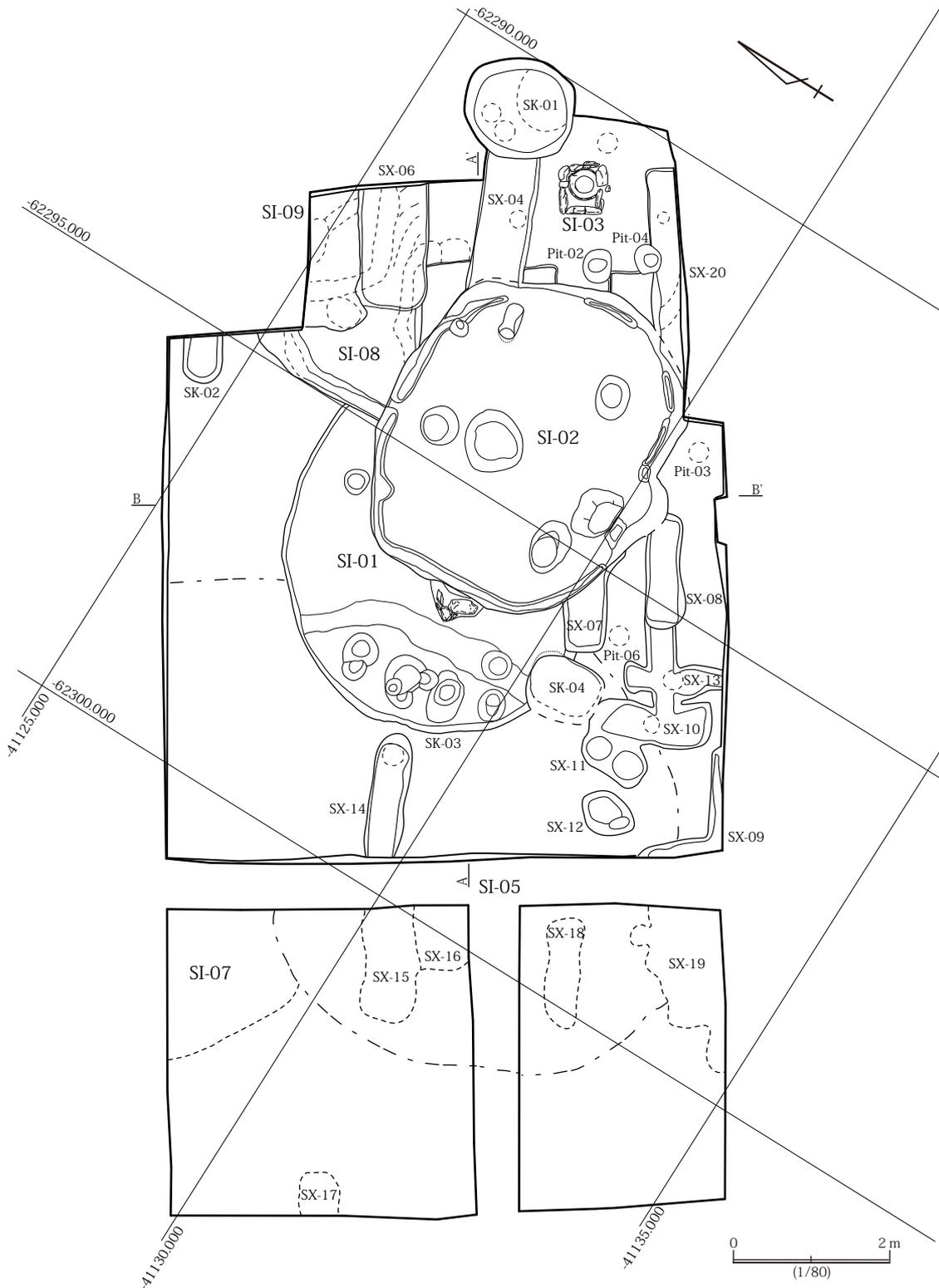


図6 A・D調査区遺構配置図

れたが、SI-01,02 住居上面に位置しており明確なプランは確定できていない。重複する SI-01,02 住居については、残存部分を完掘した。SI-03 住居は、石囲埋甕炉を確認し、その存在を確定させたが、プランについては SI-02 住居に大きく切られる上に、残存部分が調査区内に収まらず、全体を把握するに至らなかった。SI-08,09 住居については、炉など主要な部分は調査区外に存在が予想される位置であり、調査区内では周溝や立ち上がりなど部分的な確認にとどまった。

SI-05 および SI-07 住居については、西拡張区 SI-01 住居北側の遺構確認面において、住居覆土と思われる直線的なプランが

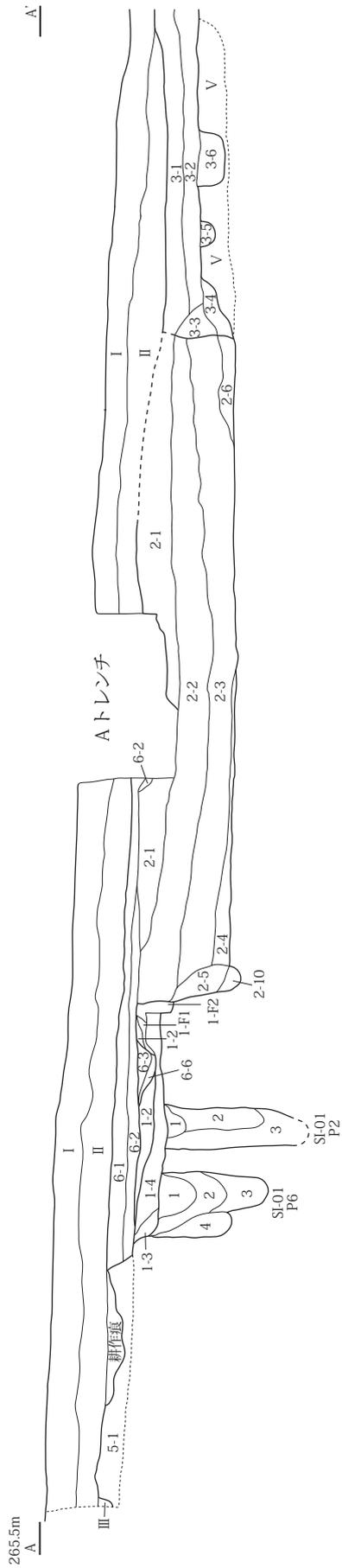
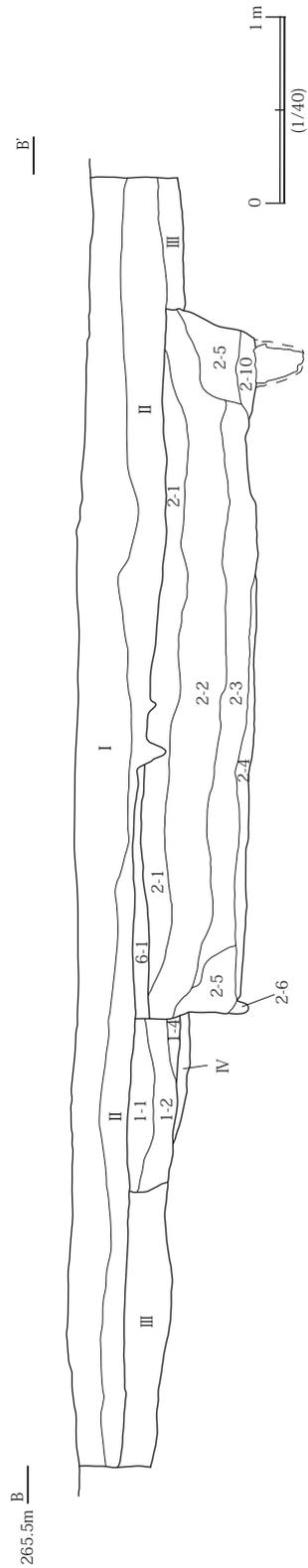


図7 A・D調査区土層断面



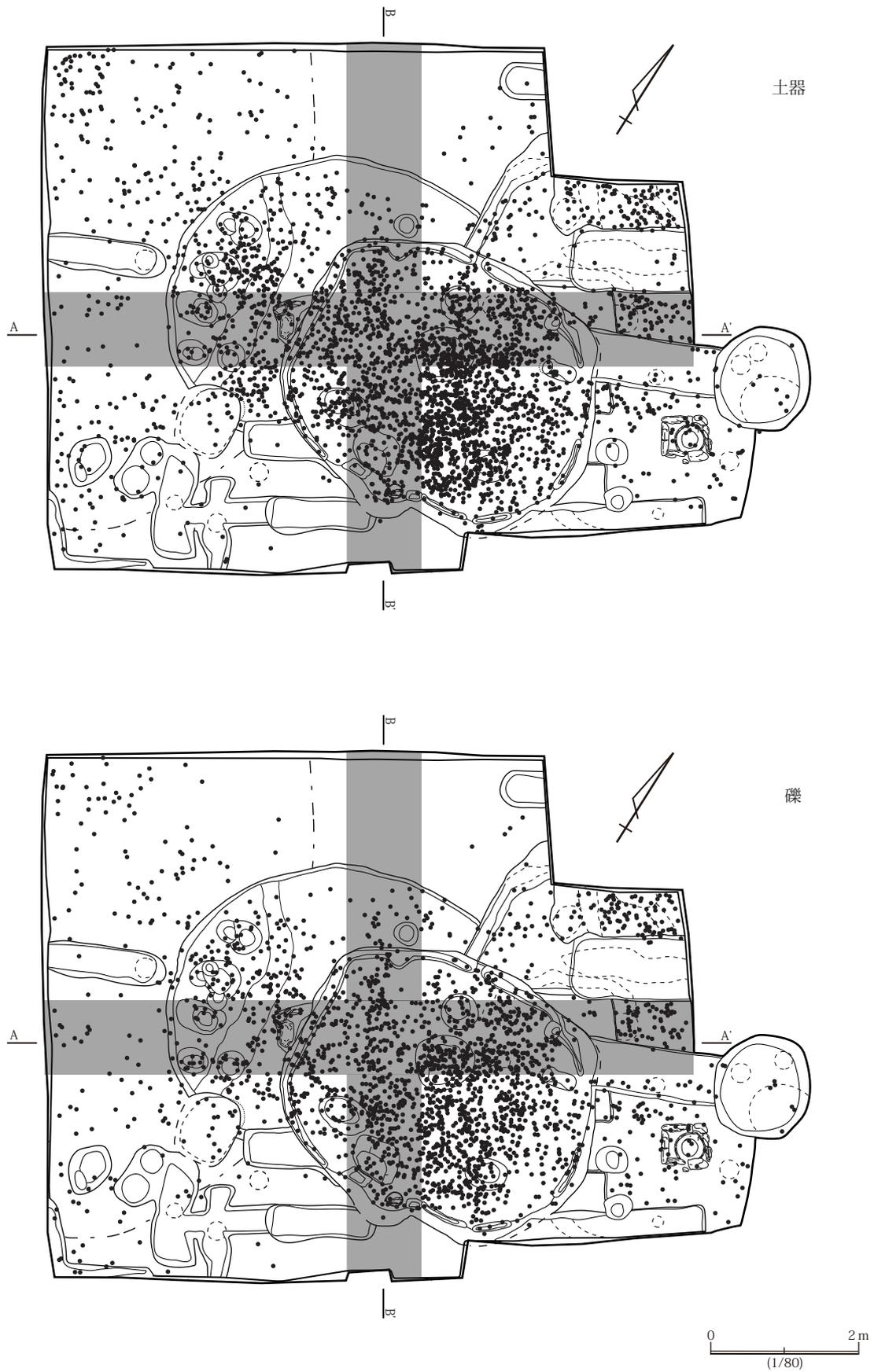


図8 A 調査区出土土器・礫分布

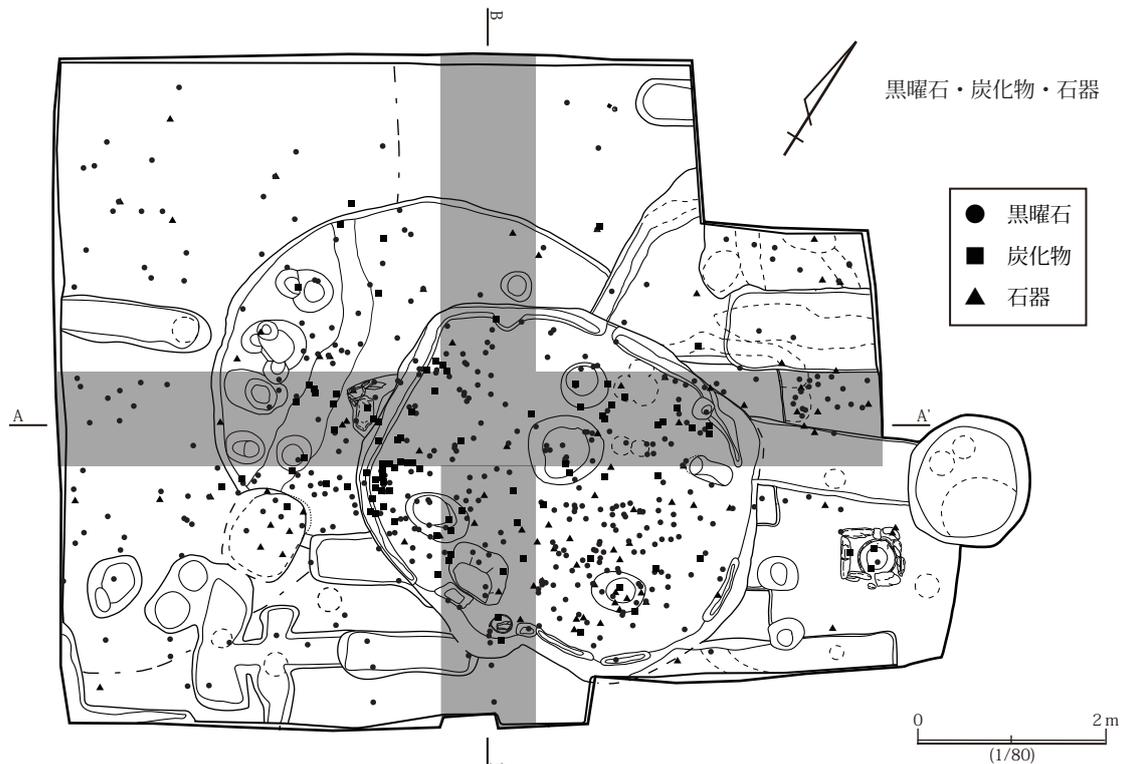


図9 A調査区出土黒曜石・炭化物・石器分布

確認した。また、SX-14の断面および底面において住居覆土・床面らしき平坦面および柱穴が確認されたことからかなり大型の住居の存在が想定でき、これをSI-05住居とした。その後、SI-01西側床面においてSI-05住居に伴うと思われる周溝及び柱穴1基を確認した。これらは上面に貼床を構築しており、SI-01住居より古い時期であることは間違いない。また、SI-05上面やSX-14内において、勝坂3式期の土器片を検出している。加えて、SX-14内で検出されているSI-05床面の観察により、床面がSI-01よりも深いことから、勝坂期に属する住居であると予想しているが、所属時期については不確定である。

SI-05住居のプラン確認の目的でD区を掘り下げたところ、D区側でSI-05住居と考えられる黒色土を含む円形の黒色土のプランと、確認面の観察でSI-05住居に切られている円形のプランが確認され、SI-07住居とした。SI-07住居はD区における上面確認にとどまり、A区側では明確に認識できなかったが、可能性としてはSX-14およびSI-01住居の北西側でSI-05住居に切られながら残存し、A区西拡張区のプラン確認面でのやや直線的と観察されたラインがSI-07住居の北東側のプランである可能性が考えられる。しかしながら、上述のように、部分的なプランの確認に止まり、サブトレンチなどでの床面や断面の確認をおこなっていないため、SI-07住居については、未確定である。

遺物の出土状況として、SI-01,02住居を中心とした分布図を掲載した(図7~10)。2種類以上のマークを用いている場合は図版毎に凡例を付けている(図9,10)。また、土層断面図に関しては、A・B断面線を中心とした1m幅に入る遺物を投影している。なお、ドットによる記録はII層からおこなっており、表土にあたるI層に関しては一括で取り上げている。各遺物とも同様な出土傾向を示しており、竪穴住居跡など縄紋時代の遺構が存在する箇所によく分布する。逆に遺構が検出されていない北部の出土は極めて少ない。A調査区西部は明確な遺構のプランが確認できなかった範囲だが、土器・礫が一定の量で分布がする。これらはSI-01床面で確認されているSI-05周溝の内側に遺物の分布が認められることから、SI-05覆土上層の遺物とみることが可能である。
(小林謙一・矢嶋良多)

B調査区(図11)

2008年度に、Aトレンチの北東約7.5mの位置に、Bトレンチとして長さ4.6m、幅1mを設定した。深さ40cmほど掘り下げたところ、トレンチの南側からソフトローム漸移層および、Pit-01が検出された。半裁したところ、黒色でふかふかの覆土が認められ、近代に属するピットと判断した。

またトレンチ西壁にかかる位置にPit-02が検出され、黒褐色のややしまった覆土が確認され、古代に属する柱穴と判断した。
Pit-02 1層:10YR2/3(黒褐色)・粘性小・しまりやや小・やや柔らかい

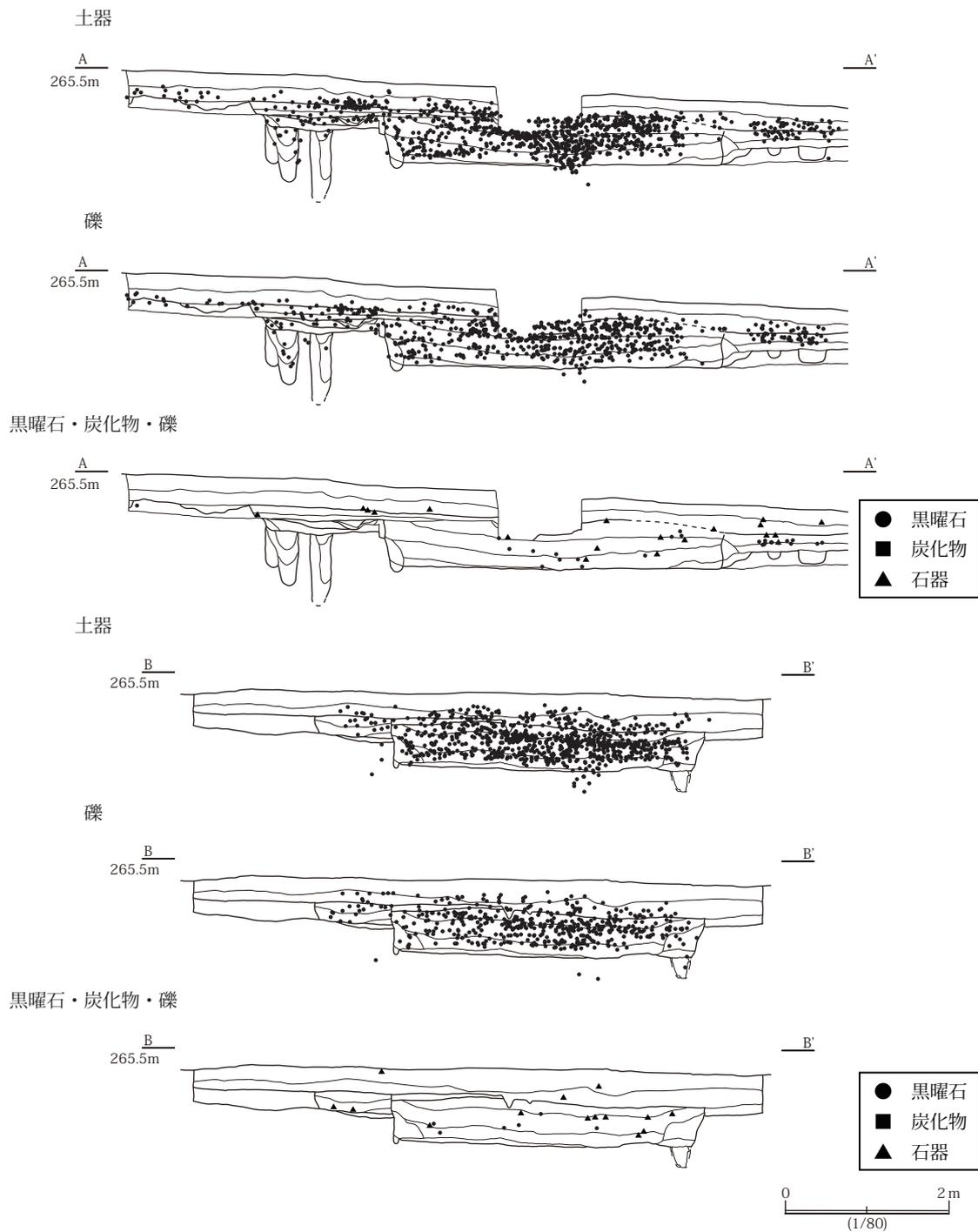


図 10 A 調査区出土遺物別土層断面分布

Pit-02 2層:10YR2/3 (黒褐色)・粘性小・しまりやや小・やや柔らかい・黄色スコリア径2～4mm5%・炭化物径2～3mm1.5%

トレンチ北側は暗褐色土の落ち込みが広がり、縄紋住居の存在が予想されたため、Bトレンチ西側に幅30cmのサブトレンチを設定し、20cmほど掘り下げたが住居のプランが確認されなかった。また、Pit-01の壁面において暗褐色土の立ち上がりが認められ、不確定ながらプラン確認されたので、縄紋住居覆土と推定してSI-04住居とした。プランを確認するため2008年度にBトレンチ北拡張区、2009年度にBトレンチに直交する東西トレンチを設定した。2010年度に直交トレンチにおいて、黒色土の落ち込みを確認し、精査したところ、幅1m・深さ30cmほどの北東から南西方向に伸びるトレンチ跡であることが確認され、第2次調査のトレンチであることが推定された。また、2010年度では、Bトレンチ南側に基本層序確認用の深掘りを設定し、深さ1m正面から1.2mまで掘り下げ、ハードロームのL1H層まで確認した。

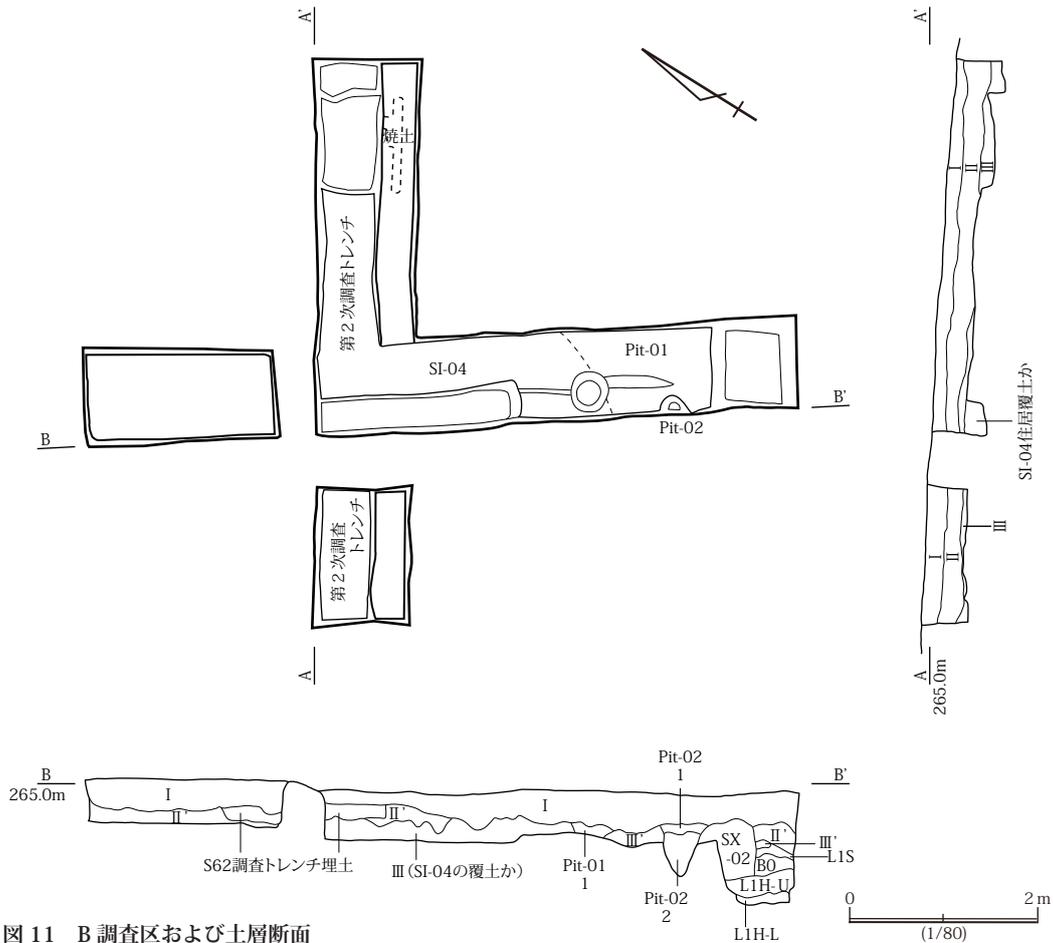


図 11 B 調査区および土層断面

縄文時代遺構の確認作業を2010年度までおこなったが、遺構覆土の広がりには認められるものの、プランが明確に把握できないため、埋没谷などによる全体的な落ち込みか、複数の住居が重複するなどによって全体に縄文包含層が広がっているのが判断できなかった。Bトレンチ北拡張区を中心に縄文土器片が検出されており、SI-04とした縄文住居がBトレンチ北側に存在しているものと考え、調査は断念して2010年度に埋め戻した。

(小林謙一)

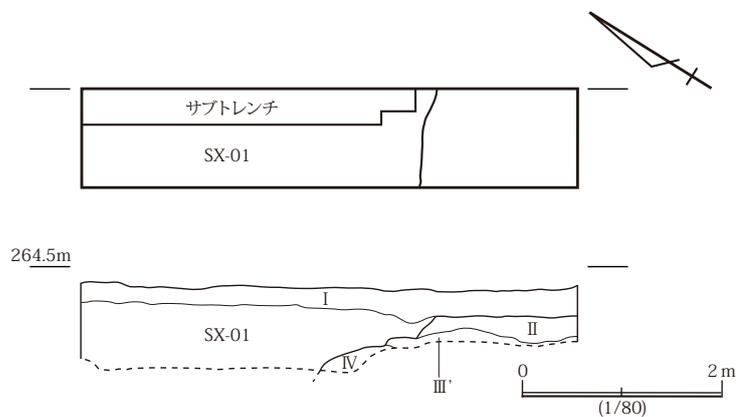


図 12 C 調査区および土層断面

C 調査区 (図 12)

2008年度に、Bトレンチの北東約6.2mの位置に、Cトレンチとして長さ5.2m・幅1mのトレンチを設定し、掘り下げた。表土から約40cm掘り下げたところ、トレンチ南側ではソフトローム漸移層が検出されたが、北側ではほぼ同一のレベルで、やや柔らかい黒色土の落ち込みが検出された。確認のためBトレンチ内に幅50cmのサブトレンチを設定し、掘り下げたところ、黒色土はややふかふかした土質をしており、南から北に向けてなだらかに落ち込んでいく掘込みが確認された。近代に伴う掘込みと判断しSX-01としたが、トレンチ外に大きく広がっており、形状・大きさ・性格は不明である。なお、上面において縄文時代後期に属する磨消縄文を持つ土器片が1片検出されたが、プライマリーな出土ではないと判断された。C調査区については、縄文時代の遺構の残存は期待できないと判断し、埋め戻した。

(小林謙一)

(2) 住居跡

第3次調査では竪穴住居が9軒検出され、SI-01,02,03,06,08,09 住居の6軒の発掘調査をおこなった。そのうち、完掘に至った住居はSI-01,02,S06の3軒である。いずれの住居も縄紋時代中期中葉～後葉に帰属する。

SI-01 住居跡 (図13・14)

平面形 楕円形 規模 7.5㎡ (現存) 主軸 北東方向 (推定) 長軸 404cm (現存)

検出状況 2008年度調査において最初に設定したトレンチのうち、Aトレンチにおいて、表土から多量の縄紋土器が出土し、遺構の存在が推測された。トレンチを掘り下げると、北西部においてⅢ～Ⅳ層が確認できた段階で黒色の落ち込みと磨製石斧を含む礫数点が半弧状に並ぶような状態で検出され、SI-01住居と確認された。また、トレンチ中央部において遺物を多量に含むSI-01覆土と異なる黒い層が検出されており、先のAトレンチ北西部側の落ち込みと重複していることがわかったが、新旧関係については不明確な点が多く、新たに東拡張区・北拡張区を設定し、Aトレンチとともに掘り下げた。2009年度ではさらに調査区の拡張をおこなった。この拡張に伴い、東拡張区において床面の広がりを検出し、SI-01住居のおおよそのプランが判明するとともに、Aトレンチ中央のSI-02住居がSI-01を切り、東拡張区南側においてさらに新しい「加曽利E3面」想定住居に比定されるSI-06住居が検出され、それがSI-01と重複していることが明らかとなった。2010年度に全体プランを検出し、2011年度に完掘した。

遺存状況 住居の北東部はSI-08住居を切っている。逆に、炉から住居東～東南部はSI-02住居に切られるため、床面は全体の1/2程度が遺存する。

重複関係 南部の一部の壁は縄紋時代中期から後期以降の所産と考えられるSK-04土坑、近代と思われるSX-07に切られ、壁を一部失う。西部は、SI-05住居と重複しており、SI-05周溝および柱穴(SI-05-P6)上に貼床されている。同様に古い遺構として西部にSK-03土坑が存在するが、上面は硬くしまって貼床状となり、その上に完形の土器が床面上遺棄の状態で置かれていた(3790・5561)。このような状況は他の柱穴でもみてとれ、やや位置がずれているがSI-05-P6上面(SI-01床面)に浅鉢形土器が置かれているほか、住居北部でもP5柱穴の上面やや東側の床面に大形の礫が置かれており、後述するようにP3の上面にも大形の礫が存在する。古い遺構・柱穴に対して意識的に土器・礫を残置した可能性も考えられる。

覆土

1-1層:10YR3/4(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや少ない・やや柔い・焼土粒子径2～4mm 3%・小礫3～6mm 5%

1-2層:10YR3/3(暗褐色)・粘性大・しまり大・固い・焼土粒子径1～4mm 3%・炭化物1～2mm 2%

1-2'層:10YR2/2(黒褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・焼土粒子径2～4mm 1%・炭化物1～2mm 1%

1-3層:10YR4/3(明褐色)・粘性やや小・しまりやや小・やや柔い・焼土粒子径3～5mm 3%・炭化物1～2mm 1%

1-4層:10YR3/3～3/4(暗褐色)・粘性大・しまりごく大・ごく固い・黄スコリア径1～3mm 5%・焼土粒子径3～4mm 3%・炭化物径1～2mm 1%

壁・床面 Ⅲ層上面に掘込み面が認められ、軟弱ながら直に立つ壁が巡っている。遺存状況のよい西側で壁高は約35cmを測る。床は、ロームを掘り込んだ地床で、古い遺構の上面はソフトロームなどの混ざった土で固められ、薄く貼床されている。

柱穴 残存部分ではP1・P2・P3・P5の4本が認められる。このうち、P5・P3は上面がややしまっており貼床されている可能性があること、床面レベルに大形の礫があることから古い段階の主柱穴と考える。特にP1とP3は位置が近いことため新旧があると考えられ、覆土の状況からP1はSI-01床面堆積土である1-4層を切って立ち上がっていることが確認できることから、P3が古くP1が新しい柱穴と考えられる。P5の上面にも大形の礫があり、古いピットの可能性がある。住居東側が失われているため柱穴配置は不明確であるが、古い段階の柱穴はP3・P5に加えて東側に2本の柱穴があれば4本主柱穴と考えられる。なお、P1は一度作り直されており、セクションに新旧の柱痕が残る。改修・改築された可能性が考えられる。

P1

1層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまり大・やや固い・黄ローム粒子径1～3mm 3%・焼土粒子径2～5mm 2%

2層:10YR2/3(黒褐色土)・粘性やや大・しまりやや大・やや柔い・黄ローム粒子径2～4mm 4%・炭化物径1～3mm 2%・小礫径3～8mm 3%

2'層:10YR2/3(黒褐色土)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・黄ローム粒子径2～4mm 4%・ロームブロック径2～3mm 5%

3層:10YR3/4(暗褐色)・粘性やや少・しまりやや少・やや柔い・ロームブロック径1～3cm 10%・ローム粒子径2～4mm 10%

4層:10YR4/6(明～黄褐色土)・粘性やや大・しまり大・固い・炭化物径2～3mm 1.5%・焼土粒子径1mm 1%

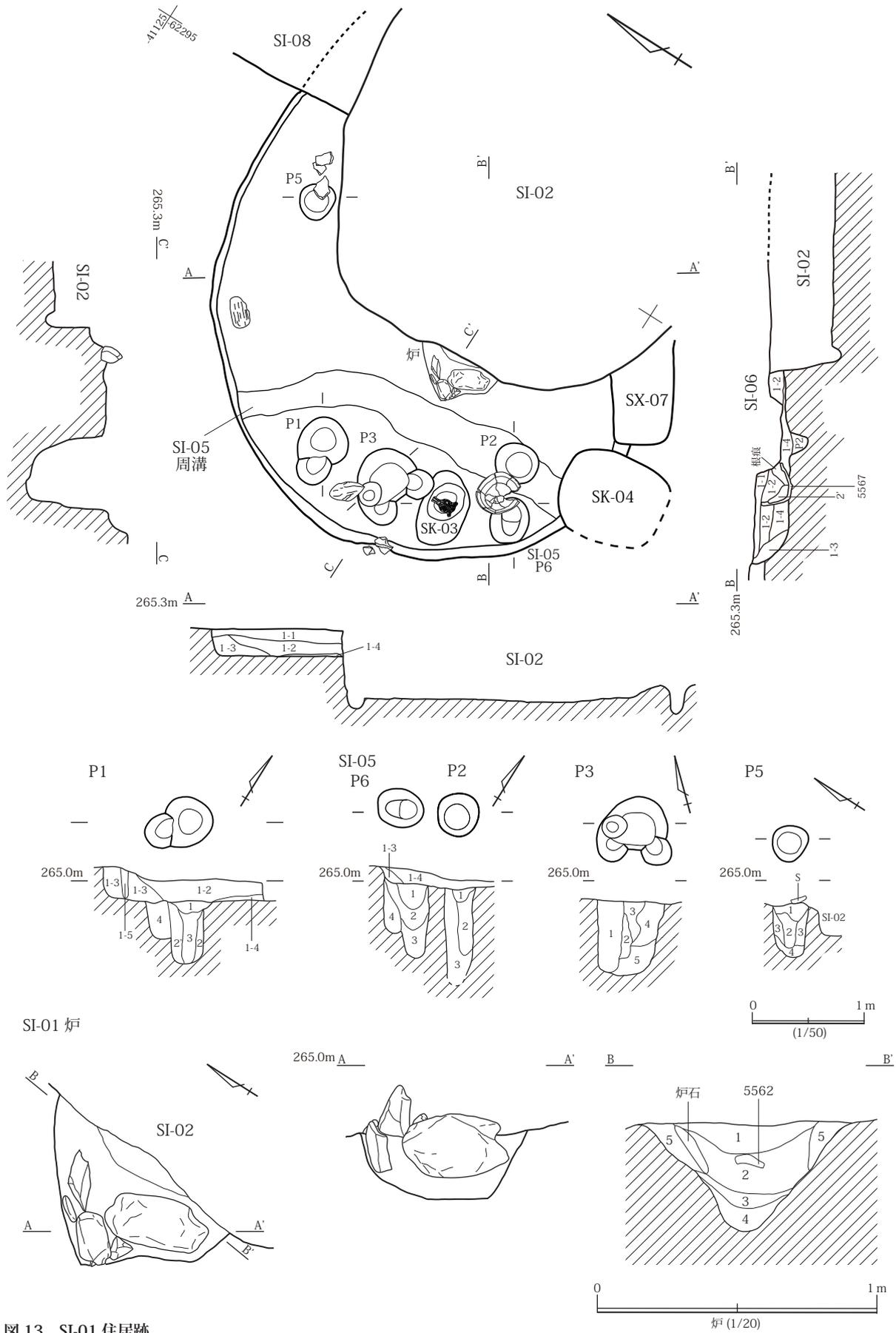


图 13 SI-01 住居跡

SK-03・SI-01 床面出土土器

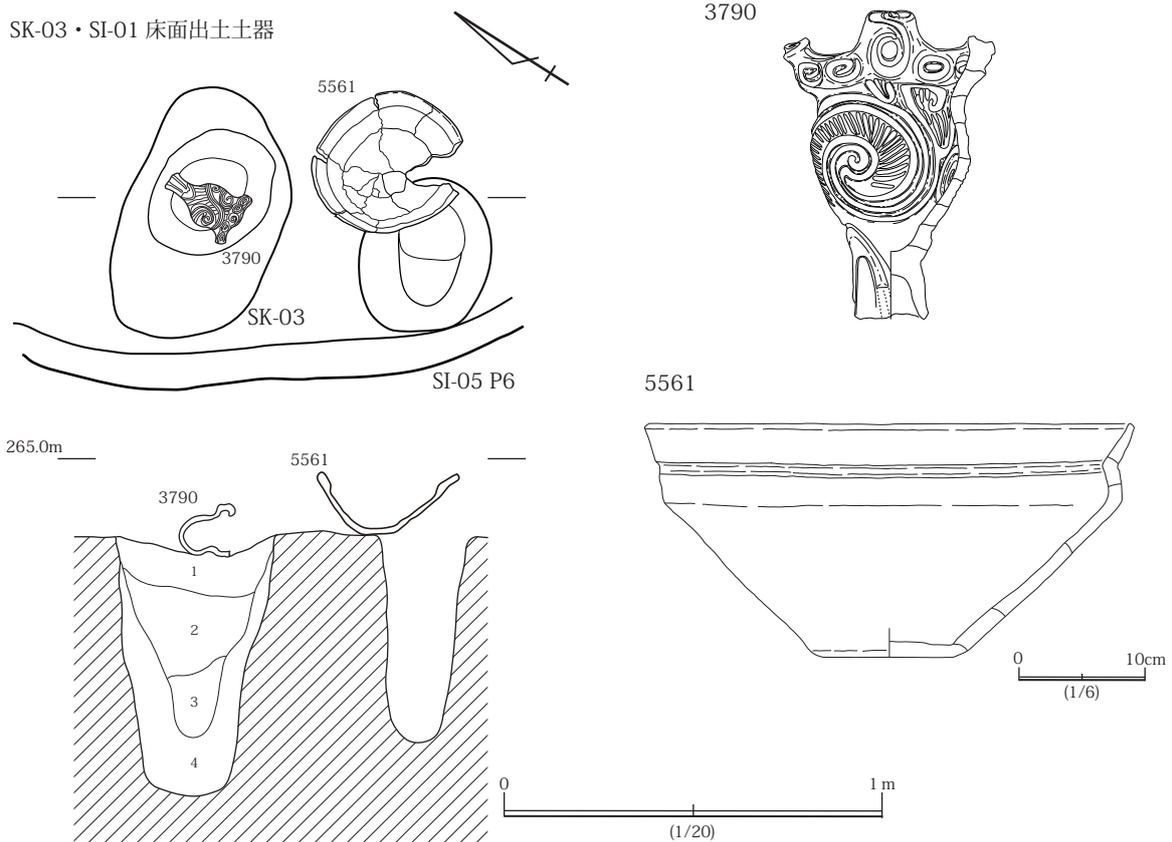


図 14 SK-03・SI-01 床面出土土器

P2

- 1層:10YR2/3 (黒褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや柔い・焼土粒子径 2～4mm 3%・炭化物径 1～2mm 2%・ローム粒子径 2～3mm 4%
- 2層:(柱痕か)・10YR3/4 (褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒子径 2～5mm 10%・ロームブロック径 1cm 3%
- 3層:10YR4/4 (明褐色)・粘性やや小・しまり大・固い・ロームブロック 1～4cm 10%・ローム粒子径 2～4mm 10%・焼土粒子径 1～2mm 1%

P3

- 1層:10YR4/3 (にぶい黄褐色)・粘性やや小・しまり小・柔い・ローム粒子径 1～2mm 1%
- 2層:10YR4/4 (褐色)・粘性やや小・しまりやや小・やや柔い・ローム粒子径 2～4mm・焼土粒子径 2～3mm 1%
- 3層:10YR4/4 (褐色)・粘性やや小・しまりやや大・やや固い・ローム粒子径 2～5mm 15%・ロームブロック径 1cm 5%・焼土粒子径 2～3mm 2%
- 4層:10YR4/6 (褐色)・粘性やや大・しまり大・固い・ローム粒子径 3～6mm 20%・ロームブロック径 1～5cm 15%・焼土粒子径 2～4mm 1%
- 5層:10YR4/4 (褐色)・粘性大・しまり大・固い・ローム粒子径 2～5mm 15%・ロームブロック径 1～2cm 5%

P5

- 1層:10YR3/3 (暗褐色)・粘性やや小・しまりやや大・やや固い・ローム粒子径 2～5mm 3%・炭化物径 1～2mm 1%・小礫径 2～4mm 2%
- 2層:10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒子径 2～5mm 10%・弱いロームブロック径 1～2cm 5%・小礫径 3～5mm 2%
- 3層:10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・ローム粒子径 2～5mm 12%・ロームブロック径 1～3cm 10%・小礫 3～5mm 1%
- 4層:10YR4/4 (暗褐色)・粘性小・しまり大・ごく固い (版築状)・ローム粒子径 2～5mm 20%・ロームブロック径 1cm 15%

P6

- 1層:10YR4/4 (明褐色)・粘性やや小・しまりやや小・やや固い・ローム粒子径 2～5mm 6%・炭化物径 2～3mm 1%・焼土粒子径 2～3mm 1%・小礫径 3～4mm 4%
- 2層:10YR3/4 (褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒子径 1～3mm 5%
- 3層:10YR2/3 (黒褐色)・粘性やや小・しまり小・やや柔い・ローム粒子径 2～5mm 10%・ロームブロック径 1～4cm 10%
- 4層:(SI-05 の壁土か?)・10YR4/6 (明褐色)・ローム粒子径 2～5mm 15%・ロームブロック径 1～3cm 10%

炉 SI-02 住居に破壊され半分の遺存であるが、住居中央やや南西よりに石囲炉が存在する。石囲は破壊により部分的な残存であるが、大形の礫が方形に組まれている。西部の角には立石状に大形の礫が直立している状況が認められる。石囲の内面に焼土層が残っている。炉覆土 2 層からは勝坂 3 式、新地平編年 9c 期の土器破片（5562）が出土しており、炉廃絶時に混入したものと考えられる。

1 層:10YR3/3 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや柔い・ローム粒子径 2～3mm 6%・弱いロームブロック径 1cm 2%・焼土粒子径 2～5mm 3%・炭化物径 2～4mm 2%

2 層:7.5YR3/4 (明褐色)・粘性やや小・しまりやや小・やや柔い・焼土粒子径 2～5mm 10%・焼けたロームブロック径 2～5mm 5%・炭化物径 2～3mm 1.5%

3 層:(焼土層) 5R4/4 (赤褐色)・粘性なし・しまりなし・やや固い・焼土粒子径 2～5mm 40%・焼けロームブロック径 3～5mm 20%

4 層:(火床下部 ロームの焼けこみ) 5R4/6 (赤褐色)・粘性なし・しまりなし・固い・焼けたローム径 2～5mm ブロック状 100%

5 層:(炉石掘方) 10YR4/6 (明褐色)・粘性やや大・しまり大・固い・ローム粒子径 2～4mm 10%・弱いロームブロック径 5～15mm 5%

埋喪 確認されていない。

入口方向 残存部分に埋喪・入口ピットが見られないこと、炉がやや南西部に寄り、奥壁側と考えられる炉の角の立石が西側であることから、SI-02 住居に破壊されている北東部に入口が想定できる。

その他 西部の壁立ち上がり上部に大型の把手が遺存していた。住居縁辺部壁上と住居屋根裾部の間に空間があり、柵状施設として用いられていた可能性が考えられる。覆土中には特に土器などの遺物が集中した遺存状況は認められなかったが、北西部壁際覆土中層に大形の礫が遺存していた。

SK-03

1 層:10YR3/3 (暗褐色)・粘性やや大・しまり大・やや固い・ローム粒子径 2～5mm 4%・ロームブロック 6～10mm 2%・炭化物 1～2mm 1%

2 層:10YR2/3 (黒褐色)・粘性大・しまりやや大・やや柔い・ローム粒子径 2～3mm 1%・弱いロームブロック 5mm 1%小礫 2～3mm 1%
焼土粒子径 2mm 1%

3 層:10YR2/2 (黒褐色)・粘性大・しまり大・柔い・ローム粒子径 2～4mm 4% 弱いロームブロック 10mm 5%

4 層:10YR2/2 (黒褐色)・粘性大・しまり大・やや柔い・ローム粒子径 2～4mm 4%・弱いロームブロック 10mm 5%

時期 床面出土の台付土器より曾利Ⅲ式期、新地平編年 11b～11c 期ころと考えられる。 (小林謙一)

SI-02 住居跡 (図 15・16)

平面形 南北方向に主軸を持つ隅丸方形を呈し、入口に突出部を有する。

規模 9.2m² 主軸 N-13度-W 382.76cm 長軸 430cm 短軸 324cm

検出状況 2008 年の調査で A トレンチ中央部から南部に至るⅢ層上面において覆土と思われる竪穴住居上面の一部が検出され、SI-02 住居とした。2009 年度以降、新たに西拡張区・南拡張区に調査範囲を広げるが、西拡張区ではⅢ層上面において SI-06 住居が検出され、また南拡張区では近現代の耕作痕などが多く検出されることから、SI-02 住居のプランは検出できなかった。2010 年度の調査では A 調査区ベルト部をⅢ層上面まで掘り下げるとともに、ベルトに沿うかたちで SI-02 住居のサブベルトを設定し、床面まで掘り下げをおこなった。サブベルトからは埋喪の一部を検出し、西拡張区・南拡張区の SI-06 覆土下からは SI-02 壁の一部が確認され、おおよそのプランが判明した。またこれと同時に、SI-01 床面を切ることがわかり、SI-06 住居および SI-01 住居との新旧関係が明らかとなった。2011 年度では床面まで掘り下げを行い、プランが明確ではなかった東側の壁を検出し、完掘に至った。

遺存状況 遺存状況は極めて良好であり、SX-04 によって北東部の一部壁面と、SX-05 によって 2-1 層の一部が壊されている程度である。

重複関係 西側は SI-01 住居、東側は SI-03,08 住居をそれぞれ切る。

覆土 覆土は、住居の中心部を窺みとしたレンズ状堆積が認められる。住居南東部 2-3 層上面において遺物の集中が確認され、なんらかの一括廃棄行為が想定できる。また、新地平編年 12a 期を中心とした土器片がみられることから、住居廃絶から 2-3 層までの埋没までにさほど時間差はないことが推察できる。

2-1 層:(上層) 10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや少ない・やや柔い・焼土粒径 2～4mm 3%・黄スコリア径 1～3mm 3%・小礫径 3～6mm 5%

2-2 層:(中層) 10YR3/3 (暗褐色)・粘性大・しまり大・固い・焼土粒径 1～4mm 3%・炭化物径 1～2mm 2%・黄スコリア径 2～3mm 3%

2-3 層:(下層) 10YR3/3 (暗褐色)・粘性大・しまり大・固い・黄ローム粒径 2～5mm 4%・焼土粒径 2～3mm 2%・炭化物径 2～5mm 2%・ロームブロック径 5～8mm 5%

2-4層：(下層) 10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・黄ローム粒径2～3mm 5%・ロームブロック径2～4cm 5%、炭化物径2～3mm 1%

2-5層：(壁土) 10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまり大・固い・ローム粒径2～3mm 5%・ロームブロック径1～3cm 5%・炭化物径1～2mm 1%

2-6層：(周溝) 10YR2/2 (黒褐色)・粘性大・しまりやや大・やや固い・ロームブロック径2～3mm 3%・黄ローム粒径2mm 1%

2-7層：10YR3/3 (暗褐色)・粘性やや大・やや固い・ローム粒径2～3mm 5% 1～2cm・炭化物径1～3mm 1%

2-8層：(地山の再堆積) 10YR2/3 (黒褐色)・粘性やや大・やや固い・ローム粒径2～5mm 10%・ロームブロック径3～4cm 30%

2-9層：10YR2/3 (黒褐色)・粘性大・しまり大・固い・ロームブロック径2～4mm 4%・炭化物径2～5mm 3%・焼礫径3～6cm 3%・枝状の炭化材を含む(径1cm長さ10cm程度)

2-10層：10YR3/4 (暗褐色)・粘性大・しまり大・やや固い・ローム粒2～5mm 3%・ロームブロック径3～4cm 3%・小礫径3～5mm 1%

壁・床面 Ⅲ層上面に掘込みが認められる。北西部の壁は直に立ち、それに沿うかたちで1条の周溝が確認されている。それに対し、入口部から南東部にかけての壁は北西部と比べ弱く立ち、周溝も断絶がみられる。壁高は10～37cm、周溝の深さは床面から8cmを測る。床はロームを掘り込んだ地床であり、一部の柱穴上に薄く貼床がされている。

柱穴 P1・P3・P4・P5・P6の5本が確認されている。そのうちP1・P3・P4の3本は三角形に配し、いずれも径52cm、深さ70cm前後を測り、柱痕もみられることから主柱穴と考えられる。P6は柱痕が南西方向に傾いており、住居外側に向いている。また柱穴上面(1層)に貼床がされており、支柱穴と考えられる。P5は深さ20cmと柱穴としては極めて浅く、周溝とほぼ同じ深さである。周溝との重複関係は土層断面からは確認できず、主軸線対称側の位置に周溝の張り出しがみられることから、このP5は周溝の一部とも考えられる。

P1

1層：10YR3/4 (暗褐色) 粘性やや小・しまりやや大・やや柔い・ローム粒径3mm 3%・ロームブロック径5～6mm 5%・炭化物径2～3mm 1.5%

2層：(柱痕) 10YR3/3 (暗褐色)・粘性大・しまり小・柔い・ローム粒径2～3mm 3%・炭化物径2mm 1%

3層：10YR4/4 (褐色)・粘性やや小・しまりやや小・やや柔い・ローム粒径2～4mm 10%・ロームブロック径5～10mm 10%

P3

1層：10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや小・しまりやや大・やや固い・ローム粒径2～4mm 8%・炭化物径2～4mm 1.5%・小礫径3～6mm 3%・焼土粒径2～4mm 1%

2層：10YR3/3 (暗褐色)・粘性小・しまり小・柔い・ローム粒径2～4mm 5%・ロームブロック径5～10mm 5%・炭化物径2～5mm 2%

3層：(柱痕) 10YR4/4 (褐色)・粘性小・しまり小・やや柔い・ローム粒径2～5mm 10%・ロームブロック径1～3mm 15%

4層：10YR4/6 (褐色)・粘性やや大・しまり小・やや固い・ロームブロック径2～5cm 40%

P4

1層：10YR3/3 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒径3mm 3%・炭化物径2mm 1%

2層：10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや小・しまりやや大・やや固い・ローム粒径3～4mm 4%・ロームブロック径5～10mm 5%

3層：(柱痕) 10YR4/4 (褐色)・粘性小・しまりやや小・やや柔い・ローム粒径2～5mm 10%・ロームブロック径3～6mm 15%

P5

1層：10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまり大・やや固い・ローム粒径2～4mm 10%・ロームブロック径5～8mm 5%・炭化物径1～2mm 1%

2層：10YR4/6 (褐色)・粘性小・しまり大・固い・ローム粒径2～4mm 25%・ロームブロック径10～20mm 20%

P6

1層：(貼床) 10YR3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・ごく固い・ローム粒径2～4mm 10%・小礫径3～8mm 3%

1'層：(ロームの貼床) 10YR4/6 (褐色)・粘性やや大・しまりやや大・ごく固い・ローム粒径2～5mm 30%・ロームブロック径1～3cm 30%

2層：(地山崩落土) 10YR3/3～3/4 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・ローム粒径2～4mm 8%・ロームブロック径5～10mm 10%

3層：(柱痕) 10YR3/3 (暗褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒径2～5mm 6%・ロームブロック径5～10mm 10%

4層：10YR4/6 (褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・ローム粒径3～4mm 20%・ロームブロック径5～10mm 30%・焼土粒径1mm 1%

炉 炉は円形に掘り込まれた地床炉で、住居の中心からやや北側に寄っておりP3に接する。深さは床面から16cmを測る。炉底面は中心部に焼土が確認されるものの範囲が狭く、炉覆土も焼土粒および炭化物の混入が少ない。

1層：7.5YR3/4 (暗褐色)・粘性やや小・しまりやや大・やや固い・焼土粒径1～4mm 5%・ローム粒径2～4mm 4%・炭化物径1～5mm 2%

2層：10YR4/6 (褐色)・粘性やや小・しまり大・固い・ローム粒径2～5mm 30%・ロームブロック径1～2cm 30%・焼土粒径1～2mm 2%

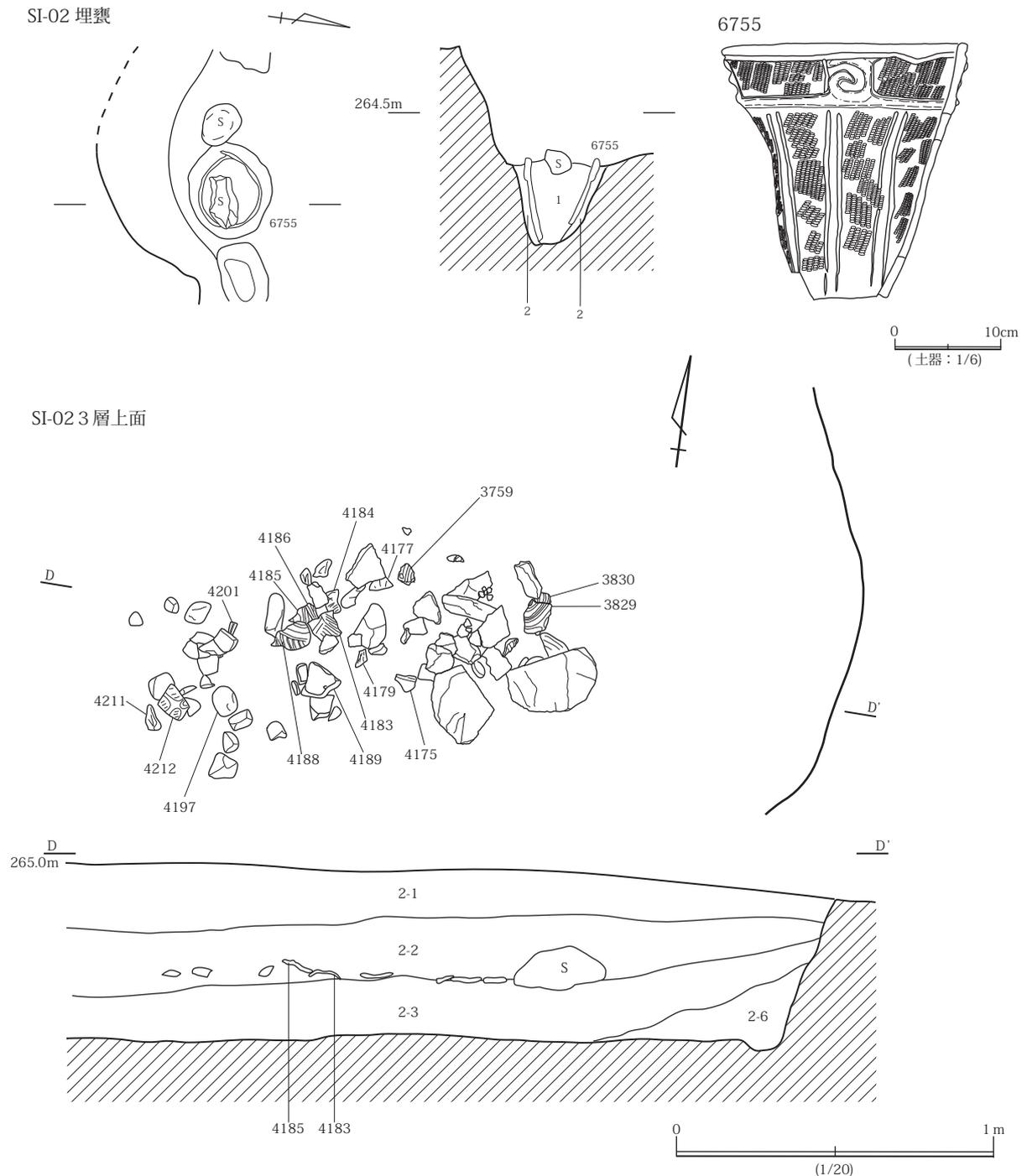


図 16 SI-02 埋喪・2-3層上面遺物集中地点

埋喪 住居南側の突出部において加曾利 E3 式の埋喪が正位で、ほぼ垂直に埋設されていた。土器は底部が欠損し、胴部に円形の穿孔がされていた。埋喪の上には蓋状に石が置かれていた。掘方は長径 30cm、短径 26cm、床面からの深さ 24cm を測る。また、土器の上端は床面から約 2cm ほど突出していた。

入口施設 前述したように入口部は突出しており、突出部のほぼ中心部に埋喪が埋設されている。その両側には対になるピットが確認されており、入口部に伴う柱穴と考えられる。入口部の壁面は住居壁面と比べ立ち上がりが緩やかである。また、対になるピットの北側に接する位置において盛土が検出された。

1層:10YR4/3 (褐色)・再堆積ローム・ローム粒径 2～5mm 20%・ロームブロック径 1～5cm 40%・焼土粒径 1～2mm 1%

2層:10YR3/3 (暗褐色)・しまり大・やや固い・ローム粒径 2～4mm 5%・焼土粒径 2～3mm 1%

時期 埋喪より加曾利 E3 式前半期、新地平編年 12a 期と考えられる。

(矢嶋良多)

SI-03 住居跡 (図 17)

平面形 不明 規模 3.87㎡ (現存) 主軸 不明 長軸 不明 短軸 不明

検出状況 2009年度の調査においてAトレンチ東拡張部SX-20底面において周溝、北拡張区においてSI-01住居に切られた立ち上がり(北拡張区の遺構は2011年度の調査でSI-08と判明した)を検出したため、北拡張区・東拡張区にまたがって竪穴住居の存在が推測され、これをSI-03住居とした。続いて2010年度の調査では周溝の内側にあたるSX-05の底面から石囲埋甕炉が検出され、SI-03住居の炉として位置づけた。その後、2011年度では炉周辺の調査を行い、炉とSX-20底部で確認されている周溝を位置関係からSI-03住居の遺構と推測した。また、SI-09住居を検出したことなどからSI-03住居の北側プランは当初の想定より南側を通ることが明らかになり、SX-06の底部に検出されていた2～3条の周溝の帰属をSI-03住居に伴う遺構と認定した。

遺存状況 遺存状況は極めて悪く、壁および覆土がSI-02および近現代における耕作痕等に壊されており、住居の範囲が不明確である。

重複関係 西側はSI-02住居に切られる。北側はSI-08住居の覆土を切る。SI-09住居は現代の耕作痕であるSX-06によって壊されているが、SI-03周溝をSI-09周溝が切っている。

覆土

3-1層:(上層)10YR3/4(暗褐色)・粘性大・しまりやや大やや固い・焼土粒径2～3mm 2%・黄スコリア径2～3mm 5%・炭化物径2～5mm 3%・ロームブロック径5～8mm 2%

3-2層:(下層)10YR3/3～3/4(暗褐色)・粘性大・しまり大・固い・黄スコリア径2～3mm 8%・炭化物径3～5mm 2%・弱いロームブロック径1～3cm 10%・焼土粒径2～5mm 3%

3-3層:10YR3/4(褐色土～明褐色)・粘性やや大・しまり大・やや固い・焼土粒径2～3mm 2%・ローム粒径3～5mm 5%・弱いロームブロック径1～3cm 5%

3-4層:10YR4/6(黄褐色～明褐色)・粘性やや少・しまりやや大・固い・ロームブロック径2～5cm 30%・ローム粒径2～5mm 10%・焼土粒径2～3mm 3%

3-5層:(周溝)10YR4/3(にぶい黄褐色)・粘性やや小・しまり大・固い・ローム粒径2～3mm 5%・ロームブロック径5～20mm 10%

3-6層:(周溝)10YR4/3(にぶい黄褐色)・粘性やや大・しまり大・固い・ローム粒径2～3mm 5%

壁・床面 壁は遺存状態が悪いものの、東側に近接するの現代の重機による植栽用の坑(カクラン坑)壁面において立ち上がりが確認されており、壁高は約25cmを測る。また、床面についても遺存状態が悪く、炉の周辺が残存している程度である。炉周辺の床は硬化しており、焼土粒を多く含む。

柱穴・周溝 前述したように現代の耕作痕に壊されているため不明な点が多いが、P1～7の7本が検出されている。そのうちP1・P2・P4・P5に関してはSX-04、SX-06、SX-20の底部において確認されており、深さが床面から30cm以上はあり、柱穴と推定できる。また、SX-04、SX-20の底面では周溝が検出されている。特にSX-06には2～3重の周溝が確認されており、住居の拡張・建替も推察できる。この周溝は後述するSI-09の周溝に切られており、このことからSI-09住居との新旧関係が明らかとなった。P6、P7は円形のプランが検出されたためピットと想定したが、SX-06の周溝上にあるため、周溝の一部の可能性も考えられる。

炉 住居の中央やや南東よりに石囲埋甕炉が存在する。石囲は大形の礫を用いて方形に組まれており、石皿および磨石を転用したものが認められる(6805・6806)。長径70cm、短径64cmを測る。炉体土器は曾利I式の「長胴甕」が用いられており、石囲内の中央からやや東側に寄って埋設されており、胴部下半部分が欠損した状態であった。掘方は土器の大きさとほぼ同規模であり、長径44cm、短径42cm、床面からの深さ29cmを測る。炉体土器の口唇部に重なるかたちで炉石が置かれており、炉体土器埋設後に炉石が設置されたことが推察できる。焼土は炉体土器覆土中からはあまり検出されず、3層とした石囲内西側にあたる炉体土器外側と炉底部に多くみられる。また、炉体土器と接する部分は若干焼けている。

1層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや少・やや柔い・焼土粒径2～4mm 1%・炭化物径1mm 1%・黄スコリア径1～3mm 1% 細かい砂粒径1～2mm 1%

2層:10YR3/2～3/3(黒褐色～暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや柔い・焼土粒径1mm 0.5%・炭化物径2～4mm 1%

3層:(燃焼部上)7.5YR4/3(褐色)・粘性大・しまり大・やや固い・焼土粒径2～4mm 3%・炭化物径1～2mm 1%・黄スコリア径1～3mm 4%

埋甕 確認されていない。 **入口方向** 不明

時期 炉体土器より曾利I式期、新地平編年10b期と考えられる。

(矢嶋良多)

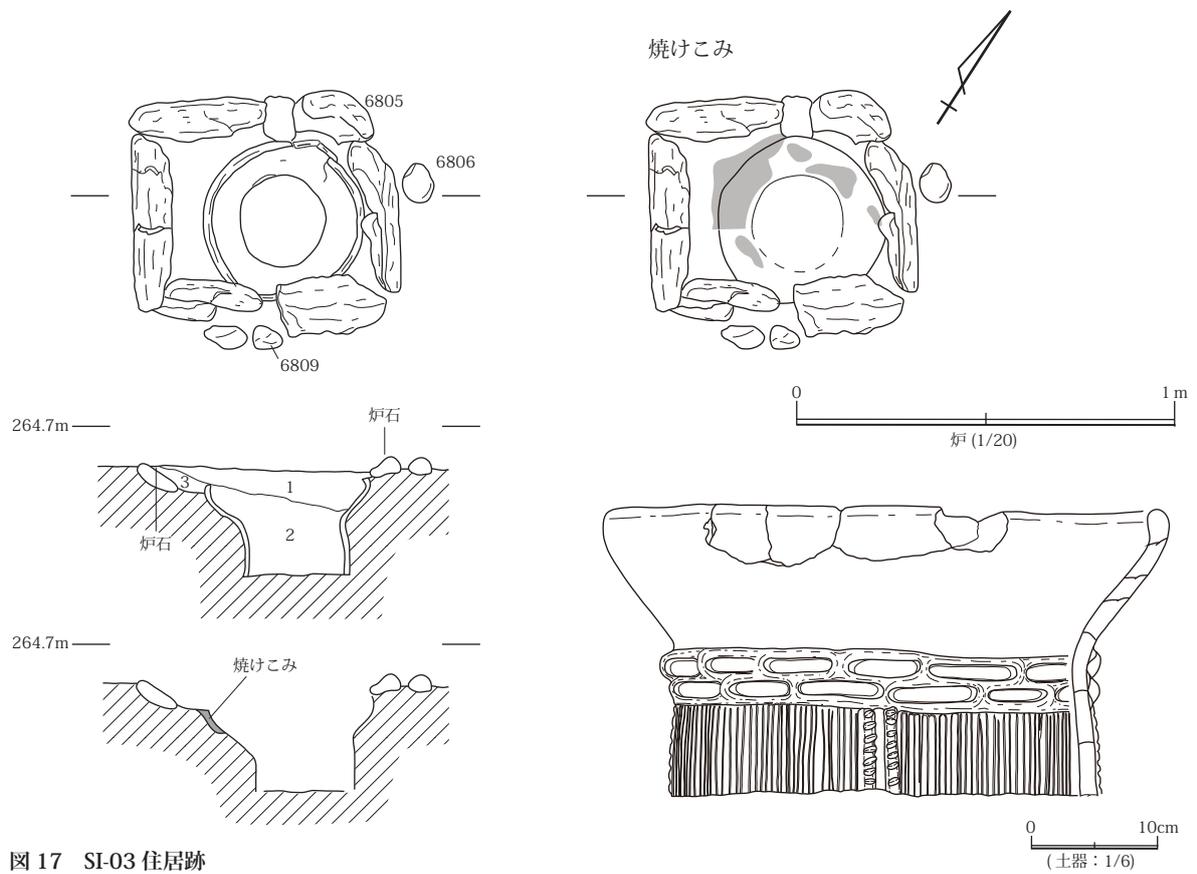
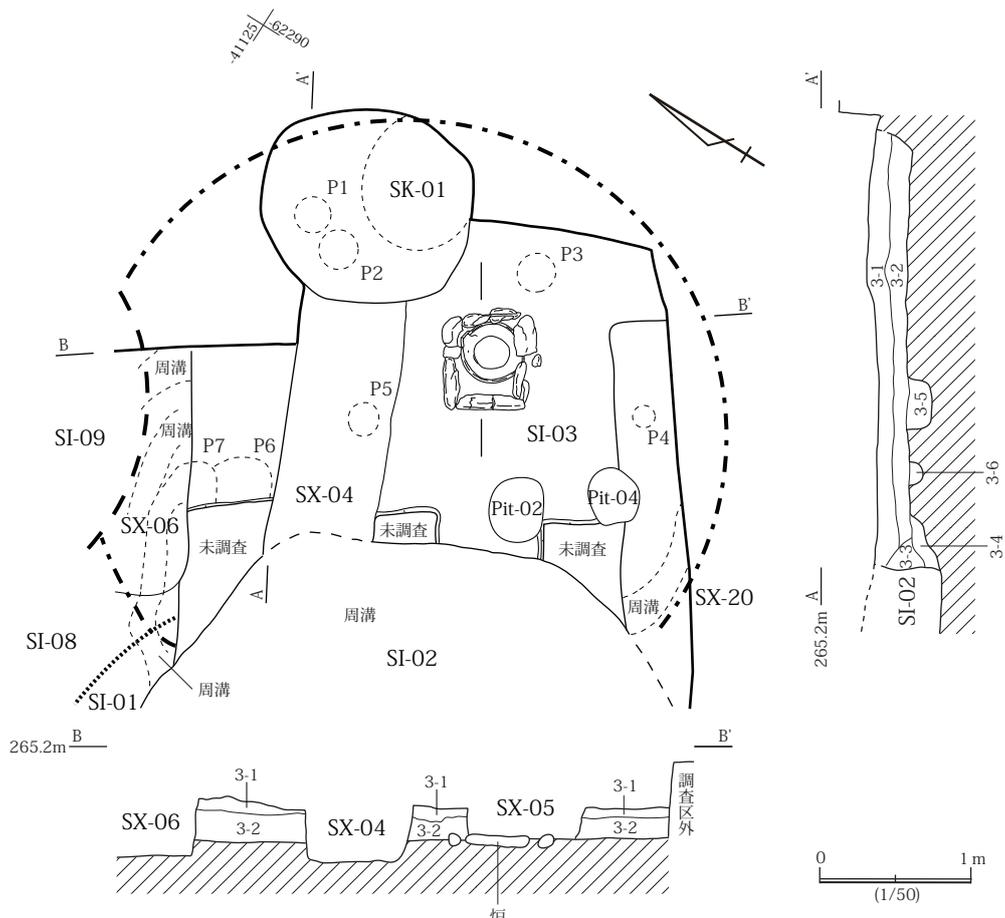


図 17 SI-03 住居跡

SI-06 住居跡 (図 18・19)

平面形 不明 規模 不明 主軸 不明 長軸 不明 短軸 不明

検出状況 2009 年度調査において、遺物包含層を掘り進め縄紋時代中期の遺構確認面に達した際に、遺物集中・硬化面が検出され、2010 年度調査では遺物集中の近くで炉が検出された。縄紋時代中期の遺構確認面で炉や埋甕、遺物集中が検出される事例は調布市原山遺跡で「加曾利 E3 面」として報告されており(宇佐美・黒尾 1993)、加曾利 E3 式後半(新地平編年 12b～c 期)には、竪穴としての掘込が浅く、炉や埋甕といった住居内施設が貧弱で、柱穴配列も規則的でなくなるなど居住痕跡が貧弱となる、「加曾利 E3 面」想定住居の増加が指摘されている(宇佐美 1998、2009)。

ここで報告する SI-06 住居も明確な立ち上がりやピットを一切検出できなかったが、炉、遺物集中、硬化面の検出と、全点ドットによる遺物出土分布から、「加曾利 E3 面」想定住居として捉えることとした。図 19 は、SI-06 住居の炉が検出されたレベルより高い位置から出土した遺物の分布を示している。なお 2008 年度調査の A トレンチではこのレベルの遺物を一括で取り上げているため、ドットが示されていない。おおよその SI-06 住居のプランを、ドット調査による遺物出土状況、炉や遺物集中の位置から推定した(図 18・19)。

遺存状況 本地点においては最も新しい住居と考えられ、SI-01,02 住居覆土の上に存在する。

重複関係 南部の一部の壁は縄紋時代中期以降の所産と考えられる SK-04 土坑、近代と思われる SX-07 に切られていると推定される。本住居跡の炉直下から SI-01 住居に伴うと考えられる大型の浅鉢の完形個体が出土しており、SI-01 住居の覆土中層、SI-02 住居の覆土上層を浅く掘り込む形で床面が存在したと考えられる。A トレンチより東側は不明である。

覆土

6-1 層 :10YR3/3(暗褐色)・粘性やや小・しまりやや大・やや柔らかい・ローム粒径 2～3mm 3%・焼土粒径 1～2 mm 1%・炭化物径 1～2 mm 1%・小礫径 1 mm 1%

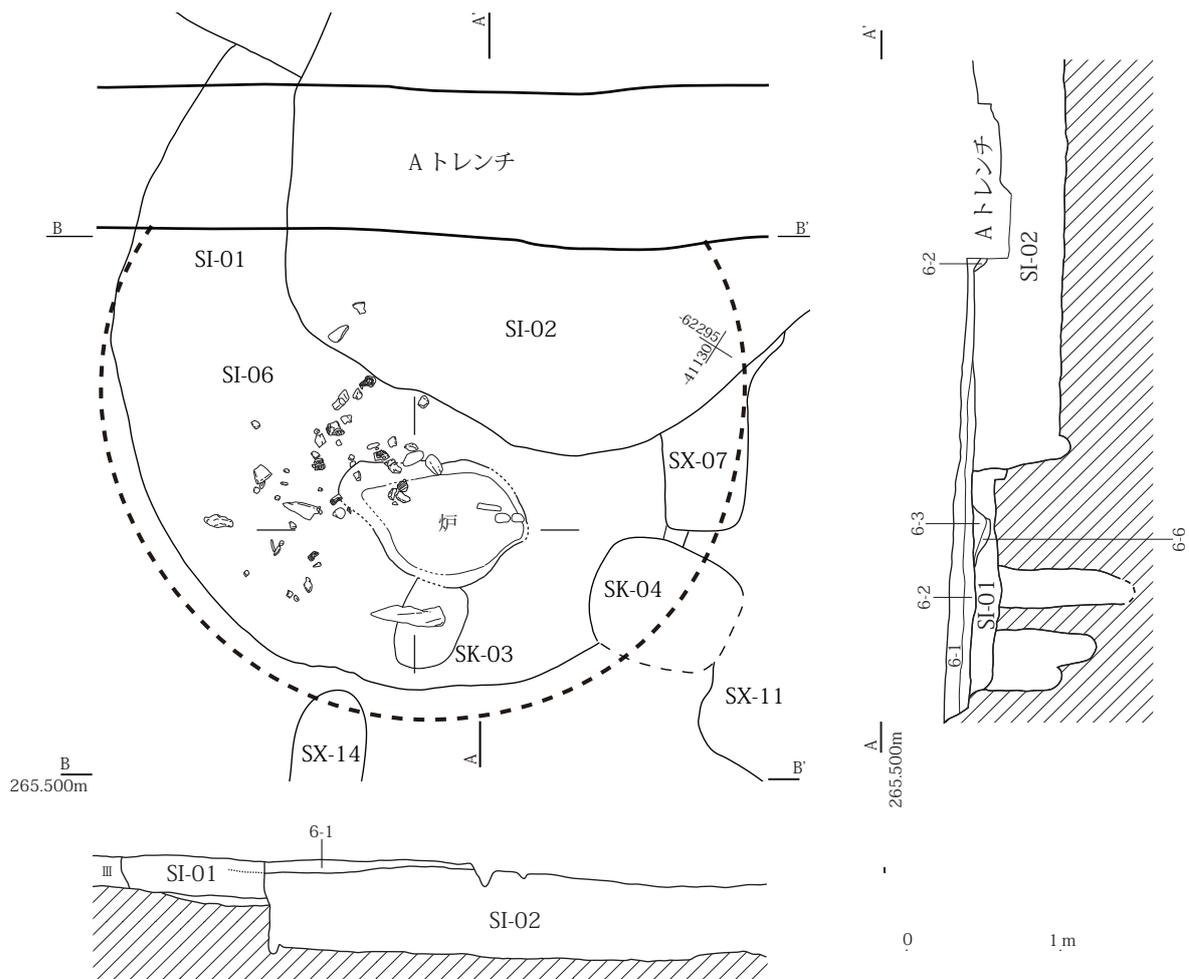


図 18 SI-06 住居跡

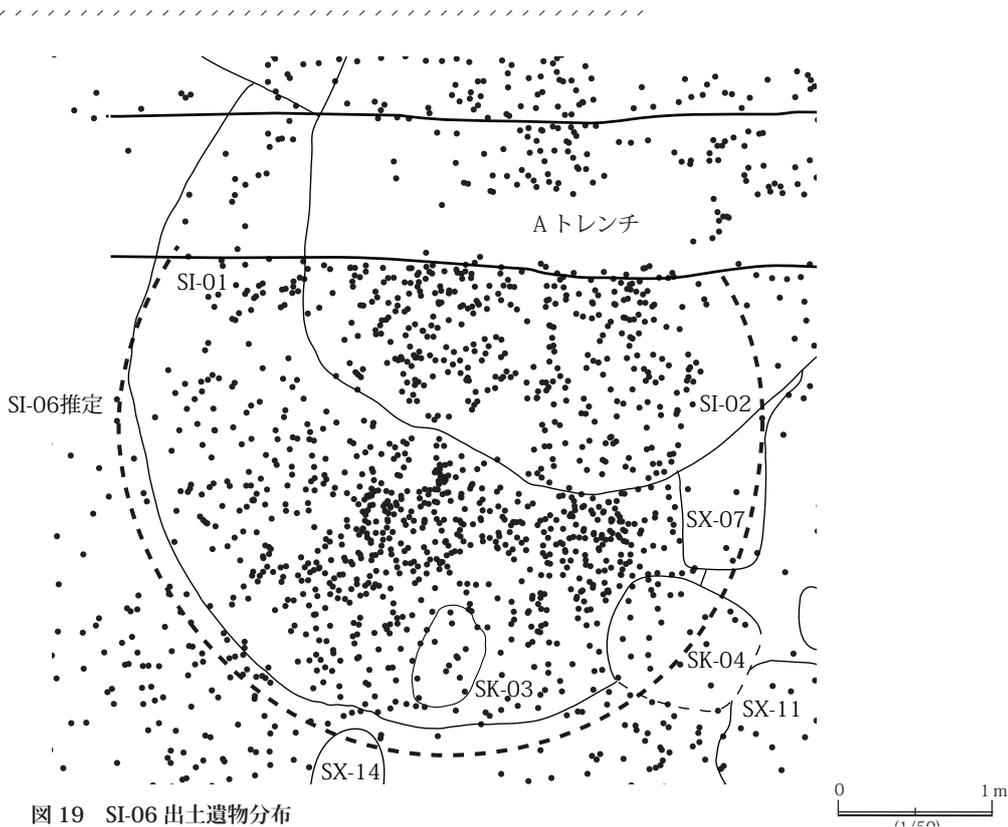


図 19 SI-06 出土遺物分布

6-2層: (貼床か) 10YR6/4 (にぶい黄橙色)・粘性やや小・しまりやや大・ごく固い・ローム粒径2~4mm 5%・弱いロームブロック径3~5cm 5%・焼土粒径3~5mm 3%・炭化物径2~4mm 2%

6-3層: 10YR3/4 (暗褐色)・やや柔い・しまりやや少・粘性やや大・炭化物1~2mm 2%・黄スコリア1~2mm 3%

6-4層: 10YR3/3 (暗褐色)・やや柔い・しまりやや少・粘性やや大・焼土粒径2~4mm 1%・炭化物径1~2mm 2%・炭化物径5mm 0.5%

壁・床面 掘り込みが浅いため、壁を検出することは出来なかった。床は炉付近に硬化面をわずかに残すだけで、あとは確認できなかった。

柱穴 不明

炉 炉は地床炉で南北方向にやや長い楕円形の掘り込みがなされており、周辺に石をまばらに配置している。炉跡から焼土と炭化材が検出されている。

埋喪 なし 入口方向 不明

その他 炉の近くに遺物集中が確認された。多くが土器片であり、时期的に12b期のものが多い。

時期 加曾利E3式後半期、新地平12b~12c期ころと考えられる。

(小澤政彦)

SI-08 住居跡 (図 22)

平面形 不明 規模 1.6㎡ (現存) 主軸 不明 長軸 不明 短軸 不明

検出状況 2008年度の調査で、Aトレンチ北拡張区Ⅲ層上面において住居の覆土と思われるプランの一部が検出された。続く2009年度では調査区の拡張および床面までの掘り下げをおこない、北拡張区西壁断面においてSI-01住居に切られる立ち上がりを確認した。この立ち上がりを当初は東拡張区で検出された周溝と共にSI-03住居として捉えたが、2010年度の調査において新たにSI-03の炉および床面を検出し、続く2011年度の調査において両調査区で検出した床面の高さが異なることが明らかとなった。このことから北拡張区で検出した立ち上がりの一部を新たにSI-08住居とし、検出面までの調査とした。

遺存状況・重複関係 調査区外の為、東側の遺存状態は不明確な点が多いが、SI-01,03,09住居および近代のSX-06の複数の遺構に切れ、現存部は住居西部の壁および周溝のみである。なお、SI-01住居については8-1層上部を切っており、床面および周溝は残存している。

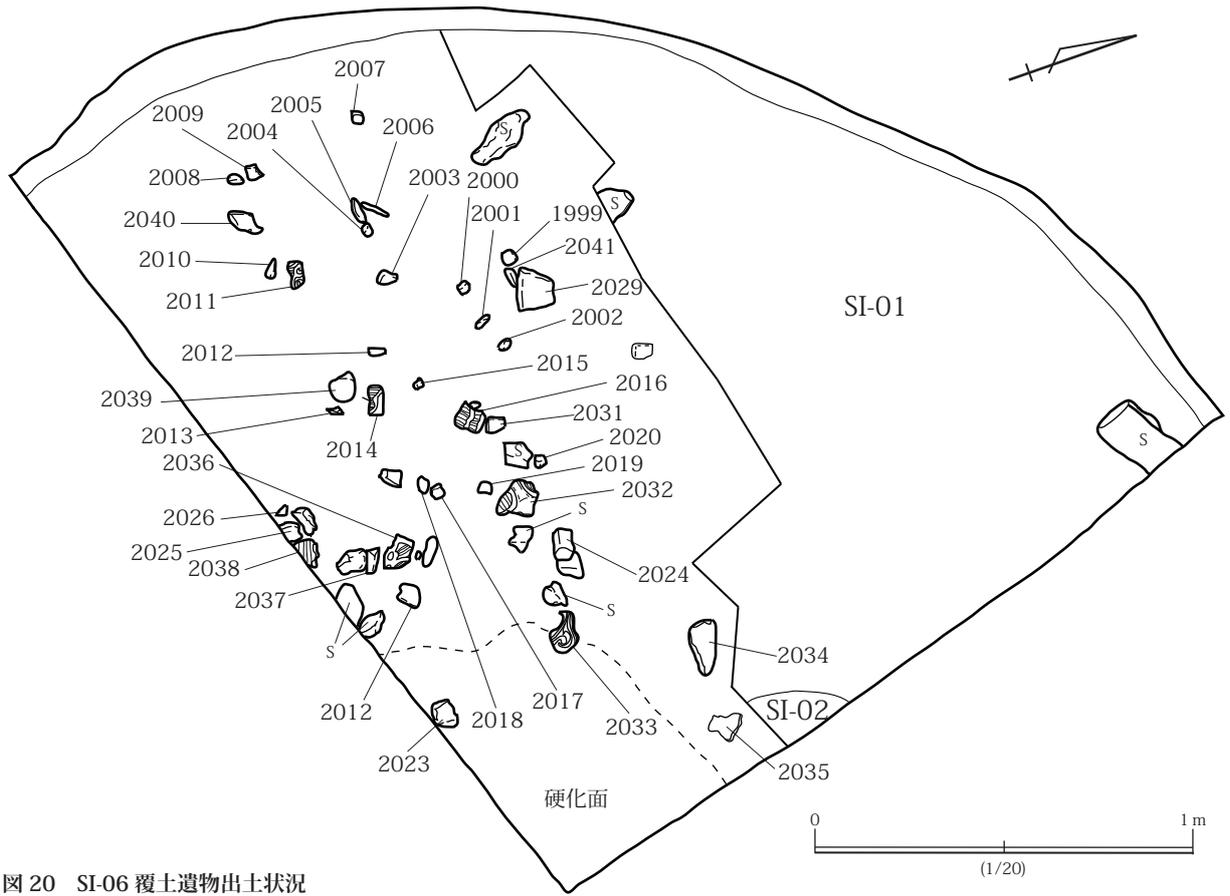


図 20 SI-06 覆土遺物出土状況

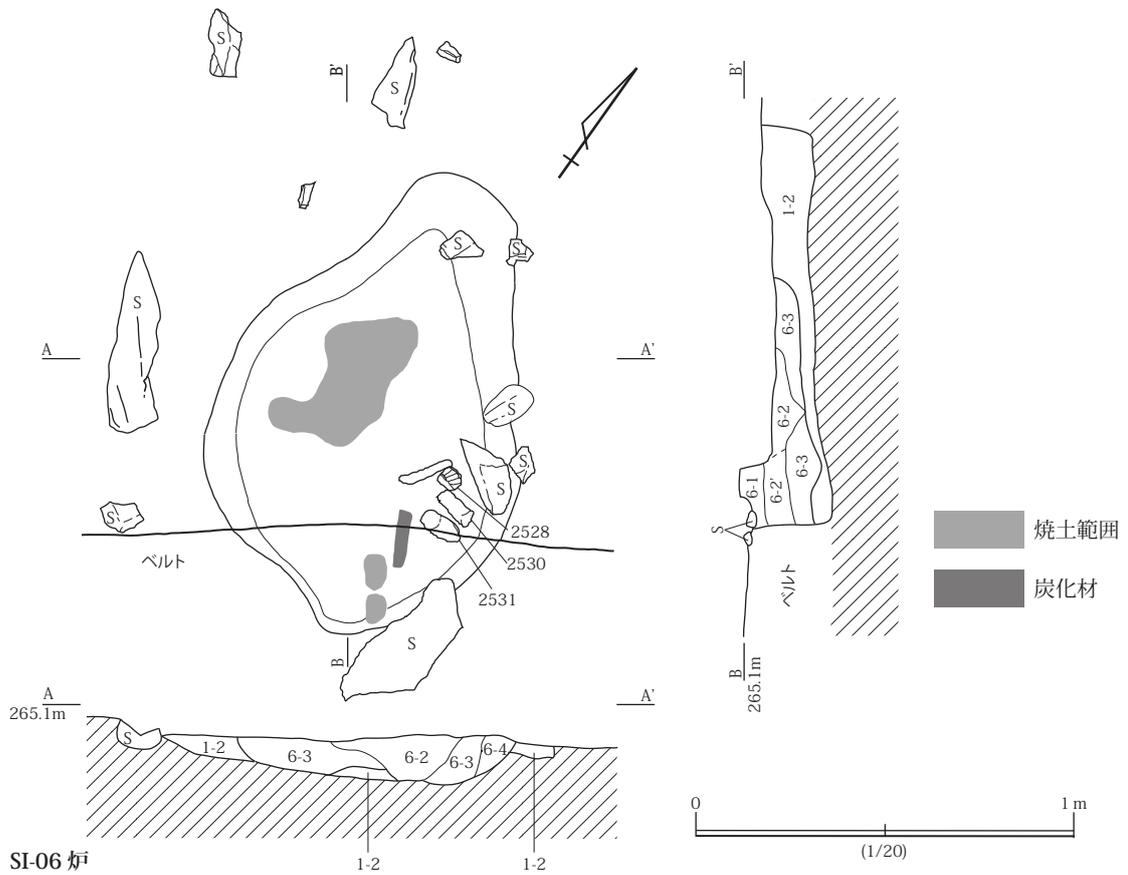


図 21 SI-06 炉

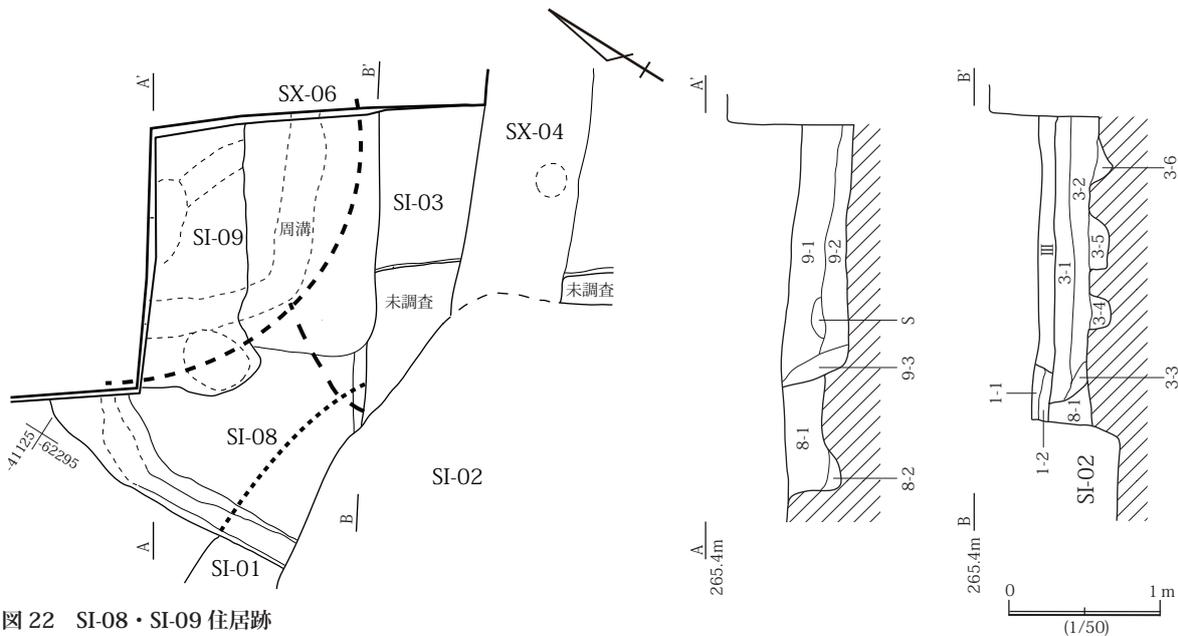


図 22 SI-08・SI-09 住居跡

覆土

8-1層:10YR2/3 (黒褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・ローム粒径2～4mm 3%・小礫3～4mm 2%・焼土粒1～2mm 1%・炭化物1～2mm 1%

8-2層:(周溝)10YR3/4(暗褐色)・粘性やや大・しまり大・固い・ローム粒径2～4mm 5%・弱いロームブロック径1～2cm 5%・焼土粒径2～4mm 2%・炭化物径1～3mm 1%

壁・床面・周溝 壁に沿うように周溝が認められる。立ち上がりはほぼ垂直であり、壁高は34cmを測る。周溝幅は約20cmであるが、北東部に巡るにつれ幅は広がり、最大で55cmまでに及ぶ。

時期 SI-03住居に切られているため、曾利I式期、新地平編年10b期以前の所産であると想定できる。(矢嶋良多)

SI-09住居跡(図22)

平面形 不明 規模 1.0㎡(現存) 主軸 不明 長軸 不明 短軸 不明

検出状況 2008年度から2009年度にかけての北拡張区調査においてSX-06底面に周溝が検出された。当初はSI-03住居の建替えに伴う周溝と想定したが、2011年度の調査において北拡張区北部の掘り下げを行うと、床面と思われる硬化面と周溝が検出された。SX-06底部で確認された周溝と繋がる点や、北拡張部北壁断面においてSI-08住居を切る立ち上がりがみられることから新しくSI-09と呼称し、床面確認までの調査とした。

遺存状況 調査区外の北側は不明であるが、遺存状態は極めて悪く、断面において立ち上がりが確認できるのみであり、明確な壁面およびプランは確認できない。

重複関係 SI-03,08を切る。SI-03住居とはSX-06底面で確認されているSI-03周溝をSI-09周溝が切っていることが認められる。

覆土

9-1層:(上層)10YR2/2(黒褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや柔い・ローム粒径2～4mm 3%・小礫3～4mm 2%・焼土粒径1～2mm 3%

9-2層:(下層)10YR2/3(黒褐色)・粘性やや大・しまりやや大・固い・ローム粒径2～4mm 4%・弱いロームブロック径1～2cm 5%

9-3層:10YR3/2(黒褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・ローム粒径2～4mm 3%・焼土粒径1～2mm 1%

壁・床面・周溝 断面から壁はやや緩やかな立ち上がりを呈し、壁高は45cmを測る。SX-06による攪乱の為不明な点が多いが、周溝がほぼ直角に曲っており、隅丸方形のプランを呈する可能性が指摘できる。

その他 北拡張部北端部に柱穴と思われる遺構や、他の住居の周溝と思われるプランが確認されているが、不明な点が多いため、確認までに留めている。

時期 詳細な時期は不明であるが、SI-03住居を切っているため、曾利I式期、新地平10b期以降の所産と思われる。(矢嶋良多)

(3) その他の遺構

住居以外の遺構は土坑がSK-01～04の4基、独立したピットがB調査区Pit-01,02、A調査区Pit-03,02,07の5基検出されている。SK-03,SK-04、A調査区Pit-03が縄紋時代、B調査区Pit-02,A調査区Pit-02が古代の所産と考えられる。近代の耕作痕であるSXにより攪乱されているところが多く、また調査期間の問題により未調査の遺構があり、本節では完掘されているSK-04およびA調査区Pit-02の記載とする。他の未調査の遺構に関しては1節の各調査区において概説している。なお、SK-03に関しては、SI-01床面出土土器との関連性からSI-01住居の説明において記載した。

SK-04 土坑 (図23)

SI-01床面において不明確ながら楕円状のプランを検出し、半裁調査をおこなった。当初SI-01住居の柱穴と想定したが、深さがSI-01の床面から84cmと柱穴にしては深く、また周辺部を精査した結果、プランがA調査区南拡張区まで広がっていることが判明し、SI-01住居を切るSK-04土坑とした。形状は隅丸方形を呈し、北側の底部は広く掘り込まれており、フラスコ状土坑の形状に近い。以上のことから縄紋時代中期後葉以降の貯蔵穴と考えられる。南西部は攪乱が多く、プランが不確定のところがあるが、長径104cm、短径88cm、深さ96cmを測る。

1層:10YR3/4(暗褐色)・粘性やや大・しまり大・やや固い・ローム粒径2～4mm 5%・弱いロームブロック径1～3cm 5%・炭化物径2～4mm 1%・小礫径3～7mm 4%

2層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや柔い・ローム粒径2～3mm 3%・小礫径3～4mm 2%・炭化物径3～5mm 1.5%

3層:10YR4/4(褐色)・粘性大・しまり大・固い・ローム粒径3～6mm 15%・ロームブロック径1～3cm 10%・炭化物径3～5mm 1.5%・小礫径3mm 1%

(矢嶋良多)

SK-04 土坑

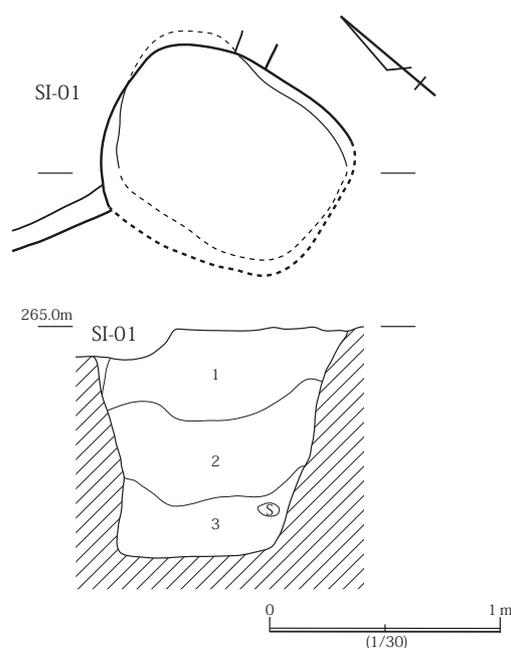


図23 SK-04 土坑

A調査区 Pit-02 (図24)

A調査区東拡張区SX-05底部(SI-03床面)において円形のプランが検出された。近代の耕作痕だと思われるSX-05がSI-03の床まで攪乱しているため、Pit-02の上部は不明である。断面では柱痕が確認されていることから柱穴と考えられ、SI-03の柱穴としては深さがSI-03床面(Pit-02検出面)から28cmと比較的浅く、また、土色も比較的黒色であることなどから、古代の柱穴と考えられる。長径42cm、短径35cmを測る。

1層:10YR3/2(黒褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒径3～4mm 3%

2層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや大・やや固い・ローム粒径5mm 3%・焼土粒2～3mm 1%

3層:10YR3/2(黒褐色)・粘性大・しまり大・固い・ローム粒径2～3mm 2%

4層:10YR3/2(黒褐色)・粘性大・しまり大・固い・ロームブロック径1cm 5%

5層:10YR3/3(暗褐色)・粘性やや大・しまりやや小・やや柔い・ローム粒径2mm 3%

(矢嶋良多)

A調査区 Pit-02

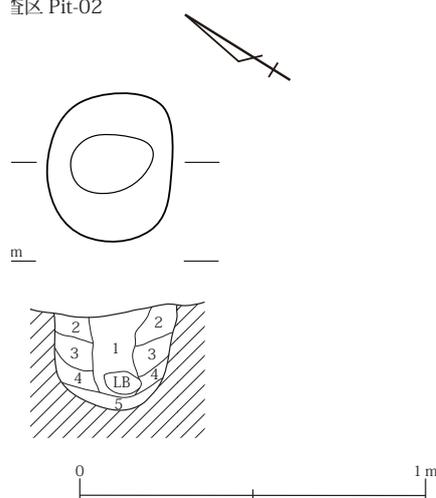


図24 A調査区 Pit-02

引用・参考文献

- 宇佐美哲也 1998 「加曾利 E3(新) 式期における居住痕跡の様相—原山地区第一地点仮称「加曾利 E3 面」想定住居の検討—」
『シンポジウム 縄文集落研究の新地平 2 発表要旨』縄文集落研究グループ
- 宇佐美哲也 2009 「縄文時代中期における集落景観の再検討 (1)」『Archaeo Clio』第 10 号東京学芸大学考古学研究室
- 神奈川県教育委員会 1980a 神奈川県地質図「八王子」 神奈川県教育委員会
- 神奈川県教育委員会 1980b 神奈川県地質図「五日市・上野原」 神奈川県教育委員会
- 河尻清和 2012 「神奈川県域に分布する四万十帯の地質」『神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学)』神奈川県立博物館
- 黒尾和久他 1993 『はらやま—都宮調布柴崎一丁目第 2 住宅建て替えに伴う発掘調査』調布市原山遺跡調査会
- 小林謙一他 2004 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定 (補)」『シンポジウム縄文集落研究の新地平 3—勝坂から曾利へ—発表要旨』縄文集落研究グループセツルメント研究会
- 小林謙一他 2010 「二〇〇八年度神奈川県相模原市大日野原遺跡の発掘調査」『中央史学』33 号 中央史学会
- 小林謙一 2011 『発掘で探る縄文の暮らし—中央大学の考古学』中央大学出版部
- 酒井 彰 1987 『五日市地域の地質』地域地質研究報告 地質研究所
- 相模湖町教育委員会 2001 『相模湖町史歴史編』相模湖町教育委員会
- 相模原市教育委員会 2003 『田名向原遺跡 I 相模原市しおだ土地区画整理事業に伴う旧石器時代発掘調査』
- 縄文時代研究プロジェクトチーム 2002 「神奈川における縄文時代文化の変遷 VI—中期後葉期—加曾利 E 式土器文化期の様相その 2 土器編年案一」
『研究紀要 7 かながわの考古学』(財)かながわ考古学財団
- 滝澤 享他 1988 「大日野原 (ケッサイコ) 遺跡の調査」『会報文化財』10 号 藤野町教育委員会
- 藤野町 1994 『藤野町史 資料編上』
- 藤野町 1995 『藤野町史 通史編』
- 藤野町教育委員会 1978 『藤野町の埋蔵文化財』
- 藤野町教育委員会 1994 『藤野町史資料編 上 原始・古代』藤野町教育委員会
- 藤野町文化財保護委員会編 1978 『ふじ乃町の埋蔵文化財』藤野町教育委員会

付編 1. 大日野原遺跡出土縄文中期土器の胎土分析

河西 学

はじめに

大日野原遺跡は、相模川支流沢井川右岸の段丘面上に位置し、縄文時代中期の遺物・遺構が検出されている。今回、縄文土器を岩石学的手法により胎土分析する機会を得たので、以下に報告する。

分析試料

分析試料は、表 3、図 25 に示す縄文土器および弥生土器からなる 10 点である。

分析方法

分析試料は、以下の方法で薄片を作製した。土器を切断機で 4 × 2.5cm 程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片をエポキシ樹脂を含ませて補強し、土器の鉛直断面切片（厚さ 2mm）を切断し、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。

表 3 試料表

| 試料番号 | 時期 | 型式分類 | 器種 | 部位 | 地点 | 備考 |
|-------|------|---------|----|-----|-------------|------------|
| No.1 | 縄文中期 | 阿玉台2式 | 深鉢 | 口縁部 | | SOH10-3487 |
| No.2 | 縄文中期 | 阿玉台1b式 | 深鉢 | 口縁部 | | SOH10-3743 |
| No.3 | 縄文中期 | 阿玉台2式 | 深鉢 | 胴部 | A区西拵 | SOH11一括 |
| No.4 | 縄文中期 | 新道式 | 深鉢 | 胴部 | 8年A2区 | X111 |
| No.5 | 縄文中期 | 藤内1式 | 深鉢 | 胴部 | 8年Aトレ | X124 |
| No.6 | 縄文中期 | 藤内1式 | 深鉢 | 胴部 | 9年カクラン | X214 |
| No.7 | 縄文中期 | 加曾利E1b式 | 深鉢 | 口縁部 | 8年Cトレ | X69 |
| No.8 | 縄文中期 | 加曾利E3式 | 深鉢 | 胴部 | 8年Aサブトレ | X85 |
| No.9 | 縄文中期 | 曾利1b式 | 深鉢 | 胴部 | 8年A2トレ東カクラン | X14 |
| No.10 | 縄文中期 | 曾利4式 | 深鉢 | 胴部 | 8年Aサブトレ表土 | X214 |

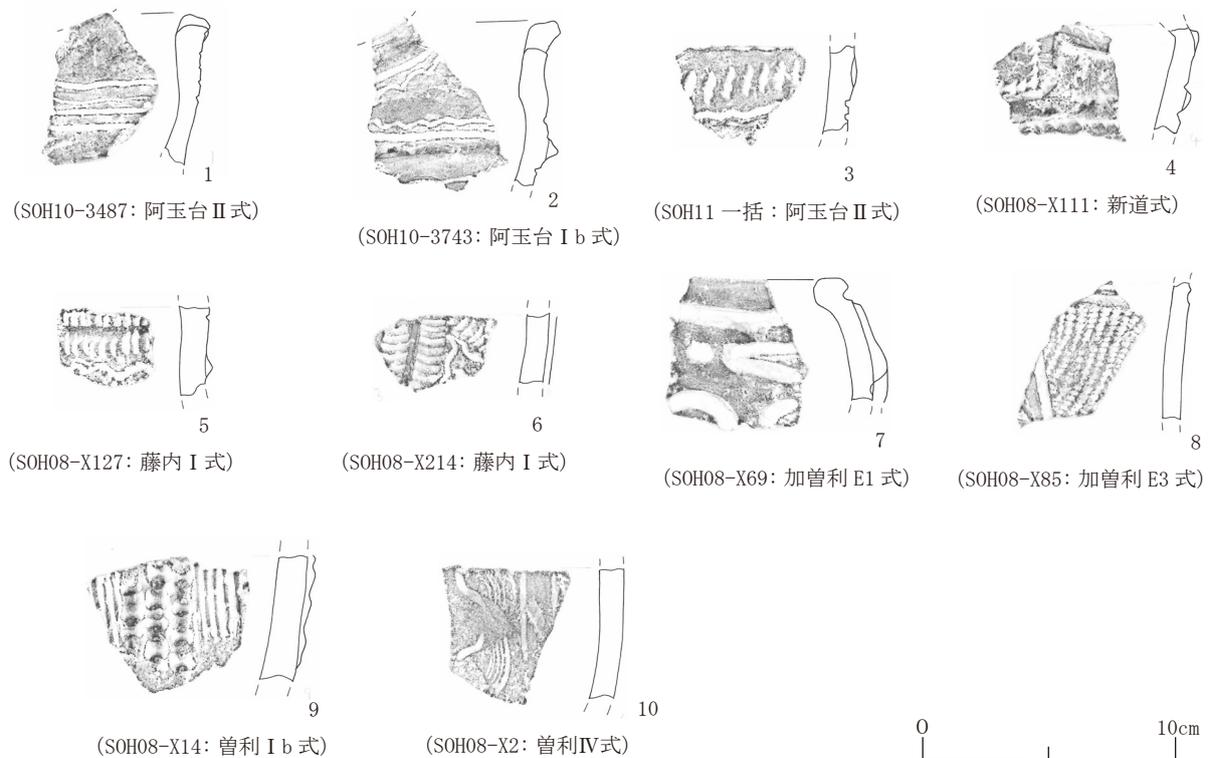


図 25 胎土分析土器試料（河西科研 2012）

表4 土器胎土中の岩石鉱物（数字はポイント数を、+は計数以外の検出を示す）

| 試料番号 | No. 1 | No. 2 | No. 3 | No. 4 | No. 5 | No. 6 | No. 7 | No. 8 | No. 9 | No. 10 |
|-------------|--------|----------|-------|-------|-------|--------|----------|----------|------------|----------|
| 石英-単結晶 | 98 | 77 | 52 | 19 | 28 | 72 | 61 | 106 | 44 | 50 |
| 石英-β型 | | | | | | | + | | | |
| 石英-多結晶 | 24 | 16 | 47 | 21 | 26 | 25 | 16 | 44 | 16 | 24 |
| カリ長石 | 17 | 7 | 11 | | 2 | 2 | 6 | 6 | 7 | 2 |
| 斜長石 | 121 | 73 | 112 | 48 | 23 | 79 | 49 | 80 | 72 | 66 |
| 黒雲母 | 72 | 123 | 240 | 3 | 1 | 185 | 3 | | 108 | 4 |
| 白雲母 | 16 | | 2 | | | 1 | | | | 1 |
| 角閃石 | 3 | 1 | 2 | + | 2 | 103 | 5 | 6 | 19 | 5 |
| 単斜輝石 | 3 | | 1 | 2 | | 3 | 2 | 2 | 2 | 6 |
| 斜方輝石 | | + | 2 | | | | | | | 1 |
| カンラン石 | | 2 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | 4 |
| 緑簾石 | 1 | | 1 | | 1 | 1 | + | | | |
| ジルコン | | | 1 | | | + | | | | |
| 不透明鉱物 | | 2 | 2 | 4 | 7 | 5 | 2 | 2 | 2 | 5 |
| 玄武岩 | | | | 6 | 2 | | 26 | 36 | | 54 |
| 安山岩 | 5 | | | 4 | | 13 | 5 | 2 | | 7 |
| デイサイト | 6 | | + | 1 | | 30 | | 3 | | 2 |
| 変質火山岩類 | 32 | 45 | 8 | 1 | 1 | 15 | 11 | 23 | | 12 |
| 花崗岩類 | 115 | 79 | 127 | 3 | 3 | 138 | 50 | 36 | 209 | 23 |
| ホルンフェルス | 6 | 2 | 1 | 167 | 335 | 5 | 57 | 61 | 26 | 89 |
| 砂岩 | 2 | | | 11 | 32 | | 6 | 4 | | 5 |
| 泥質岩 | 3 | 1 | | 25 | 46 | 1 | 20 | 16 | | 20 |
| 珪質岩 | 9 | 3 | 7 | 2 | | | 17 | 23 | | 12 |
| 炭酸塩岩 | | | | | | | | | | |
| 苦鉄質岩類 | | | | | | | | | | |
| 火山ガラス-無色 | 2 | | 2 | 1 | | 2 | | | 1 | 1 |
| 火山ガラス-褐色 | + | | | | | 1 | | | 1 | |
| 変質岩石 | 18 | 9 | 9 | 13 | 3 | 3 | 8 | 22 | 2 | 16 |
| 変質鉱物 | 19 | 30 | 14 | 9 | 5 | 16 | 7 | 10 | 17 | 17 |
| 泥質ブロック | 2 | 26 | 60 | 32 | 9 | 33 | 5 | 8 | 5 | 8 |
| カルセドニー | | | | | | | | 1 | | |
| その他 | | | | | | | | 1 | | |
| 赤褐色粒子 | 7 | 26 | 3 | 27 | 56 | 38 | 12 | 7 | 72 | 17 |
| マトリクス | 1419 | 1478 | 1298 | 1599 | 1417 | 1228 | 1631 | 1500 | 1397 | 1549 |
| 合計 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 |
| 石英波動消光 | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + |
| 石英清澄 | + | + | + | | | | + | + | | + |
| 石英融食 | | | | | | | + | | | |
| パーサイト | + | + | + | | | | | | + | + |
| マイクロクリン | + | | + | | | | | + | + | + |
| マイクロクリン-サイト | | | + | | | | | | | |
| 玄武岩の斑晶鉱物 | | | | | | | ol, cpx | ol | | ol, cpx |
| 安山岩の斑晶鉱物 | | | | | | | cpx | | | cpx |
| デイサイトの斑晶鉱物 | | | | | | | | | | q |
| 変質火山岩類岩質 | AD, D | AD, D | AD, D | B | AD | AD, D | B, AD, D | B, AD, D | | B, AD, D |
| 花崗岩類含有鉱物 | bi, mu | bi, (ep) | bi | bi | | bi, ho | bi, ho | bi, ho | bi, mu, ho | bi, ho |
| ミルメカイト | | + | | | | | | | + | + |
| 火山ガラス形態 | B, C | | B | A', B | | B, C | | | B | B |
| 植物珪酸体 | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + |

鉱物：bi黒雲母，mu無色雲母，ho角閃石，oxyho酸化角閃石，cpx単斜輝石，opx斜方輝石，olカンラン石，q：石英

変質火山岩類：A D安山岩質～デイサイト質，Dデイサイト質

火山ガラス形態：A 泡壁型平板状，A' 泡壁型Y字状，B塊状，C中間型，D中間型管状，E軽石型繊維状，F軽石型スポンジ状

さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.3mm、短辺方向に0.4mmとし、各薄片で2,000ポイントを計測した。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含めた。

分析結果

分析結果を表4に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を図26に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。変質火山岩類（凝灰岩を含める）・玄武岩・安山岩・デイサイト（1）（含流紋岩）・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩（含チャート）・炭酸塩岩（含石灰岩）・苦鉄質岩類のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示した岩石組成折れ線グラフを図27に示す。折れ線グラフのピークに基づいて土器を便宜的に分類した（表5）。クラスタ分析の樹形図を図28・29に示す。クラスタ分析は、折れ線グラフと同様の11種の岩石データを用いてR言語のhclustで行なった。クラスタ分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、ウォード法によって算出した。図28・29では、土器データを関東地域の河川砂および甲府盆地河川砂などと比較し、便宜的に数字をクラスタに付し、2分割して表示している。以下に特徴を述べる。

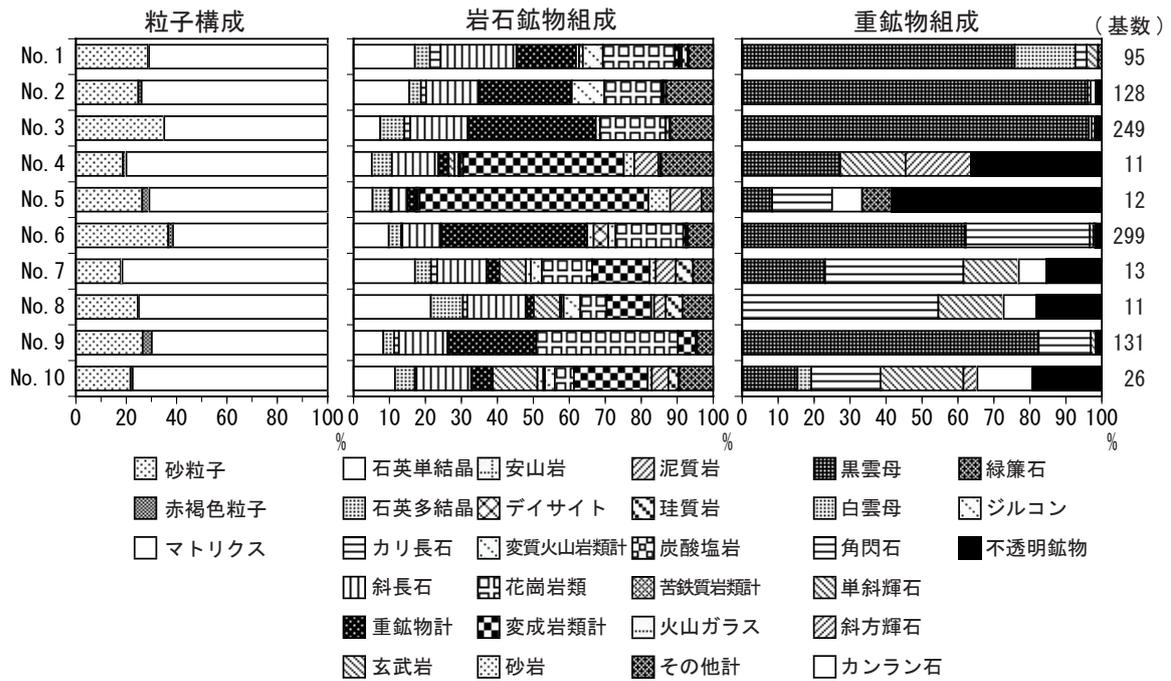


図 26 土器胎土の岩石鉱物組成

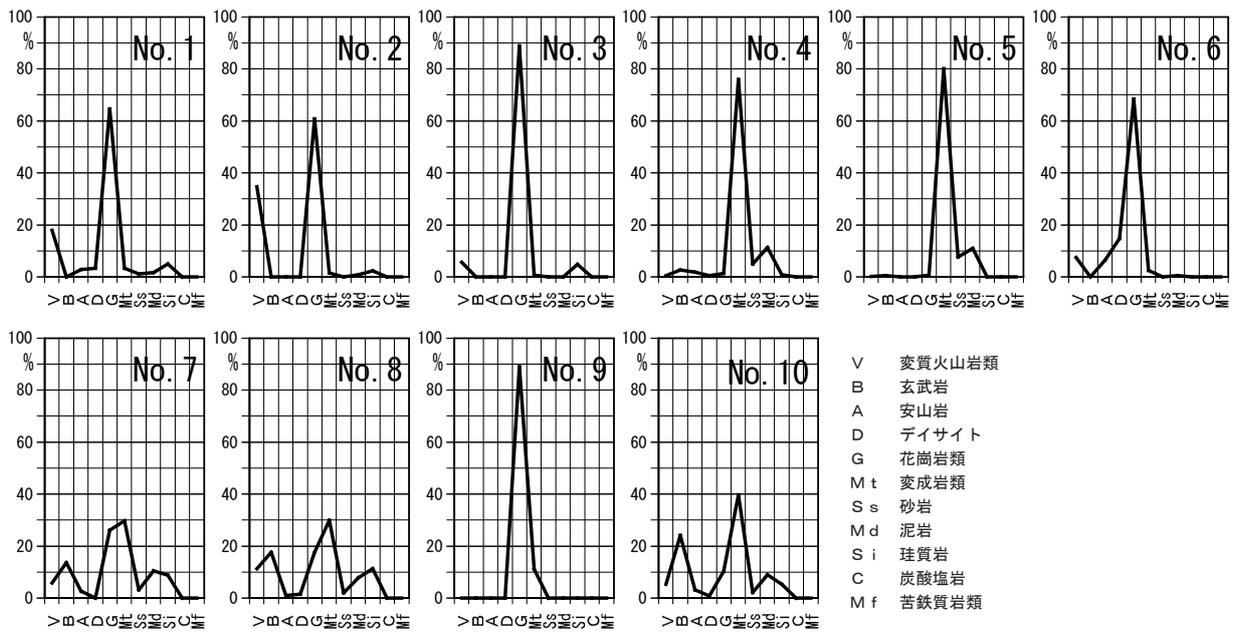


図 27 岩石組成折れ線グラフ

表 5 折れ線グラフによる土器分類

| 分類 | 折れ線グラフの特徴 | | 試料番号 |
|-----------|--------------|------------------|------|
| G 類 | 花崗岩類の第 1 ピーク | 顕著な第 1 ピーク | 3 |
| G-v 類 | | 変質火山岩類の第 1 ピーク | 1, 2 |
| G-d 類 | | デイサイトの第 2 ピーク | 6 |
| G-m t 類 | | 変成岩類の第 2 ピーク | 9 |
| M t-b 類 | 変成岩類の第 1 ピーク | 玄武岩の第 2 ピーク | 10 |
| M t-b g 類 | | 玄武岩・花崗岩類の第 2 ピーク | 8 |
| M t-g 類 | | 花崗岩類の第 2 ピーク | 7 |
| M t-m d 類 | | 泥質岩の第 2 ピーク | 4, 5 |

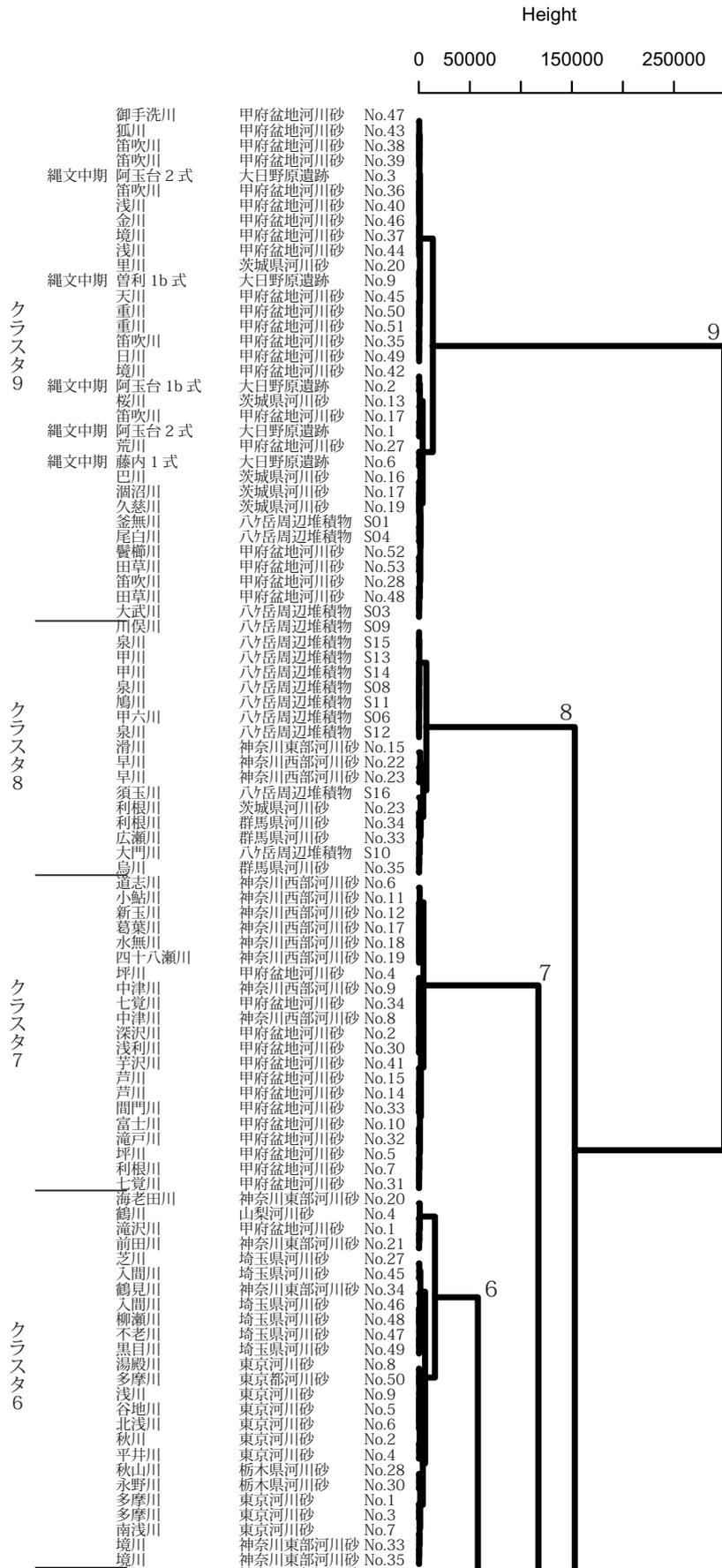


図 28 土器と関東地域河川砂とのクラスタ分析樹形図 (1)

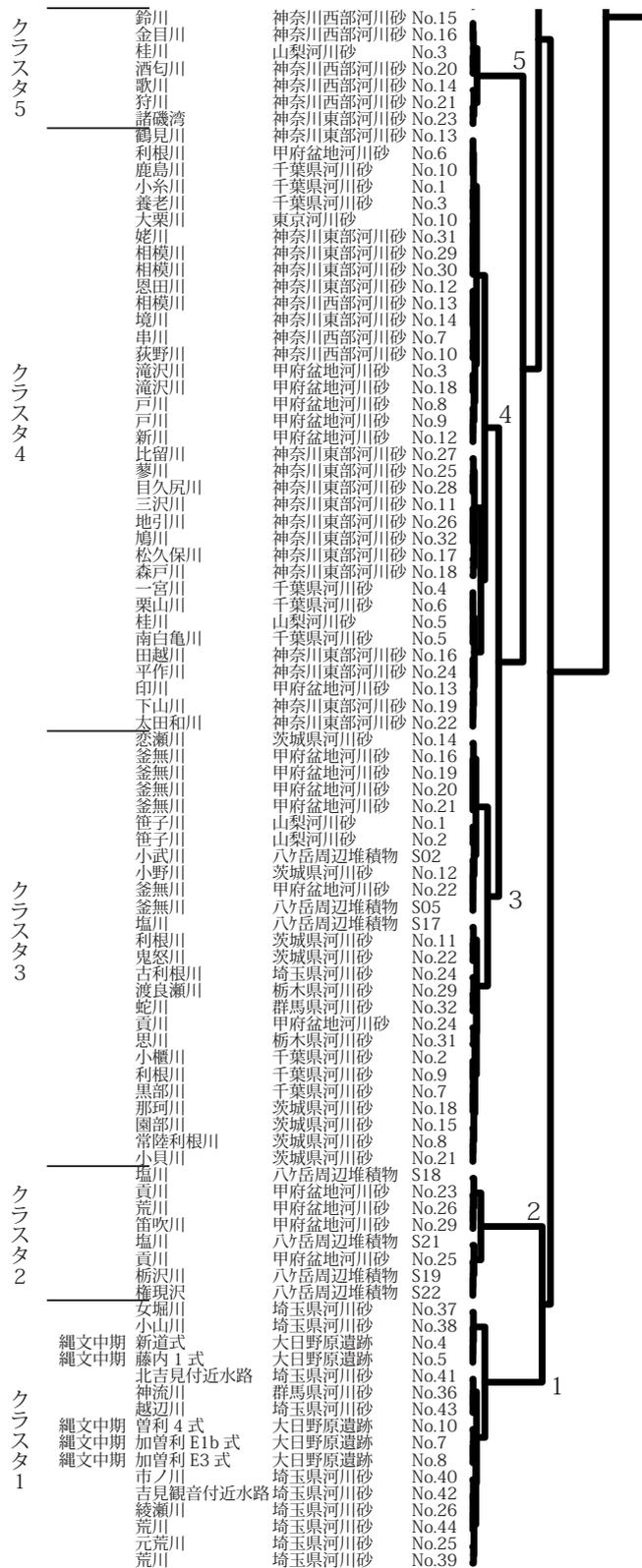


図 29 土器と関東地域河川砂とのクラスタ分析樹形図 (2)

(1) 花崗岩類主体の土器 (Nos.1 ~ 3,6,9)

全体に花崗岩類とその構成鉱物である石英・斜長石・カリ長石・黒雲母・白雲母・角閃石などから構成される。全ての試料がクラスタ9に属し、花崗岩主体地域の河川との類似性が認められる。

阿玉台式 Nos.1 ~ 3 は、変質火山岩やわずかな珪質岩・泥質岩および泥質ブロックを伴う。このほか No.1 では、デイサイト・安山岩なども検出される。重鉱物組成は、黒雲母が大部分を占め、白雲母が No.1 では 17% 含まれ、角閃石は極めてわずかである。薄片での黒雲母の最大径は、1.1 ~ 1.5mm である。

藤内1式 No.6 は、変質火山岩・デイサイト・安山岩を伴う。重鉱物組成では、黒雲母・角閃石が多い。

曾利1b式 No.9 は、ホルンフェルスを伴い、重鉱物組成で黒雲母主体だが角閃石が普通に含まれる。

以上の花崗岩類を主体とする土器は、四万十帯の堆積岩が主に分布する遺跡周辺においては、搬入原料産地が他地域の花崗岩類分布地域に推定される。Nos.6,9 の原料産地は、白雲母をほとんど伴わないで黒雲母・角閃石を主体とする特徴を示す花崗岩類分布地域が推定され、甲府深成岩などが産地候補の一つとしてあげられる。甲府深成岩体分布地域は、曾利式藤内式の分布地域と重なる。一方、阿玉台式土器 Nos.1 ~ 3 の原料産地は、黒雲母主体で白雲母を伴い角閃石が極めて少ない特徴を示す花崗岩類分布地域が推定され、有力候補の一つとして筑波岩体周辺地域があげられる。

(2) 変成岩類（ホルンフェルス）が多い土器（Nos.4,5,7,8,10）

これらの土器は、黒雲母・白雲母などを伴うホルンフェルスが多く、クラスタ1を構成する。Nos.4,5 は、ホルンフェルスからなる変成岩類を主体とし、泥質岩・砂岩を伴う岩石鉱物組成を示し、重鉱物では不透明鉱物が多く黒雲母を伴う共通した特徴を示す。Nos.7,8,10 は、ホルンフェルスからなる変成岩類のほか、花崗岩類。玄武岩、泥質岩・珪質岩・砂岩など多様な岩石を含み、重鉱物組成では角閃石・単斜輝石・カンラン石・不透明鉱物などが共通して含まれる。

クラスタ1には片岩などから構成される三波川帯などの広域変成岩地域の河川砂との類似性が示されている。しかし、ホルンフェルスの分布は、花崗岩類に接する岩石が花崗岩類の熱的影響を受けて変成した接触変成岩の広がりであり、広域変成岩の分布域と明らかに異なる。沢井川流域の地質の分布は、四万十帯を構成する小仏層群層群が分布しており、遺跡が立地する大日野原の平坦面は褐色ローム層が分布している。四万十帯の堆積岩がホルンフェルス化している状況は、山梨県の地質図においても甲府深成岩体周辺や大月市扇山周辺の花崗岩類小岩体周辺にホルンフェルスの分布が記されている程度であり、沢井川流域における状況はよく分からない（山梨県 1970、神奈川県教育委員会 1980、地質調査所 1990）。予察的に沢井川・栃谷川の河川堆積物を肉眼観察したところによると、雲母の光沢を有するホルンフェルス状岩石が堆積岩に混じって観察された。これらの周辺地質の特徴は、土器胎土の岩石組成と調和する。また土器には、新鮮な玄武岩やカンラン石を伴うことから富士山テフラ分布地域である遺跡周辺の地質的特徴を示しているといえる。以上から、これらの土器は、遺跡周辺の在地的要素が高い岩石鉱物組成を示していると考えられる。なお花崗岩類の多い Nos.7,8,10 は、桂川上流や多摩川上流域との類似性があるかもしれない。今後は、河川砂等の実際の地質試料との岩石鉱物組成の比較を通して産地を推定していきたい。

阿玉台式土器の地元原料使用の可能性について

阿玉台式土器を分析した松戸市八ヶ崎遺跡では雲母の含有の多寡が肉眼で確認され、薄片観察や蛍光X線分析においても組成のわずかな差異が認められ、雲母が少ない土器胎土では地域的特徴をある程度反映したものである可能性が示された（河西 2011）。八ヶ崎遺跡阿玉台式土器とは岩石組成折れ線グラフにおいて、花崗岩類以外の変質火山岩・砂岩・泥岩・珪質岩などの波形が本遺跡阿玉台式土器の元の類似性が認められる。一方、本遺跡で地元地域の地質的要素を示すと推定された藤内式・曾利式・加曾利E式などの岩石組成折れ線グラフと阿玉台式土器との類似性はほとんど認められない。現状では本遺跡本遺跡出土阿玉台式土器が地元地域の原料を一部用いてこの地域で製作され可能性は極めて低いと考えられる。

註1) デイサイト～流紋岩質の珪長質火山岩をここでは略称してデイサイトとしている。

参考文献

- 河西学 2011 「阿玉台式土器胎土の岩石学的手法による予察的検討—松戸市八ヶ崎遺跡の事例から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』、15、49-67 頁
- 通商産業省工業技術院地質調査所監修 1990 『日本地質図体系関東地方』朝倉書店、118 頁
- 神奈川県教育委員会 1980 『5 万分の 1 神奈川県地質図「上野原」』
- 山梨県 1970 『10 万分の 1 山梨県地質図』

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|---------------------|---|----------|------|-------------------------------|--------------|--|--------|------|
| ふりがな | おびのっばらいせき | | | | | | | |
| 書名 | 大日野原遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 第3次発掘調査 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 中央大学文学部考古学研究室調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2 | | | | | | | |
| 編集者名 | 小林謙一・河本雅人・正 洋樹・矢嶋良多・小澤政彦・小林尚子 | | | | | | | |
| 編集機関 | 中央大学文学部考古学研究室 | | | | | | | |
| 所在地 | 東京都八王子市東中野 742-1 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2012年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| おびのっばらいせき 大日野原遺跡 | かながわけんさがみほらしみどりく 神奈川県相模原市緑区 さわい 澤井 748 | 14-209 | 465 | 35° 37' 38" | 139° 08' 43" | 2008.8.18 ~ 8.30 2009.8.3 ~ 8.15 2010.8.2 ~ 8.13 2011.7.29 ~ 8.13 | 100.5㎡ | 学術調査 |
| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 大日野原遺跡 | 集落跡 | 縄文 古代 | | 竪穴住居跡 (9) 土坑 (4) 柱穴 (4) | | 縄文土器 縄文石器 土師器 須恵器 | | |

中央大学文学部考古学研究室調査報告書 2

大日野原遺跡

— 第3次発掘調査 —

発行 2013年3月31日

(2014年7月5日 第2刷)

編集・発行 中央大学文学部考古学研究室

相模原市教育委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

TEL042-674-2814

印刷 株式会社ワコー印刷



遺跡遠景 (南西から)

2008年度 Aトレンチ SI-01 住居検出状況 (北西から)



(上) 2008年度 掘削前の状況 (南西から)

(下) 2008年度 Aトレンチ調査風景 (東から)





(上)2008年度 Aトレンチ北側SI-01住居 磨製石斧出土状況(北東から)
(下)2009年度 調査風景 (南西から)



2009年度 Aトレンチ SI-02住居覆土上層遺物集中地点(北東から)



(上) 2008年度 Bトレンチ (南東から)
(下) 2009年度 Aトレンチ Pit-02 土層断面 (北東から)



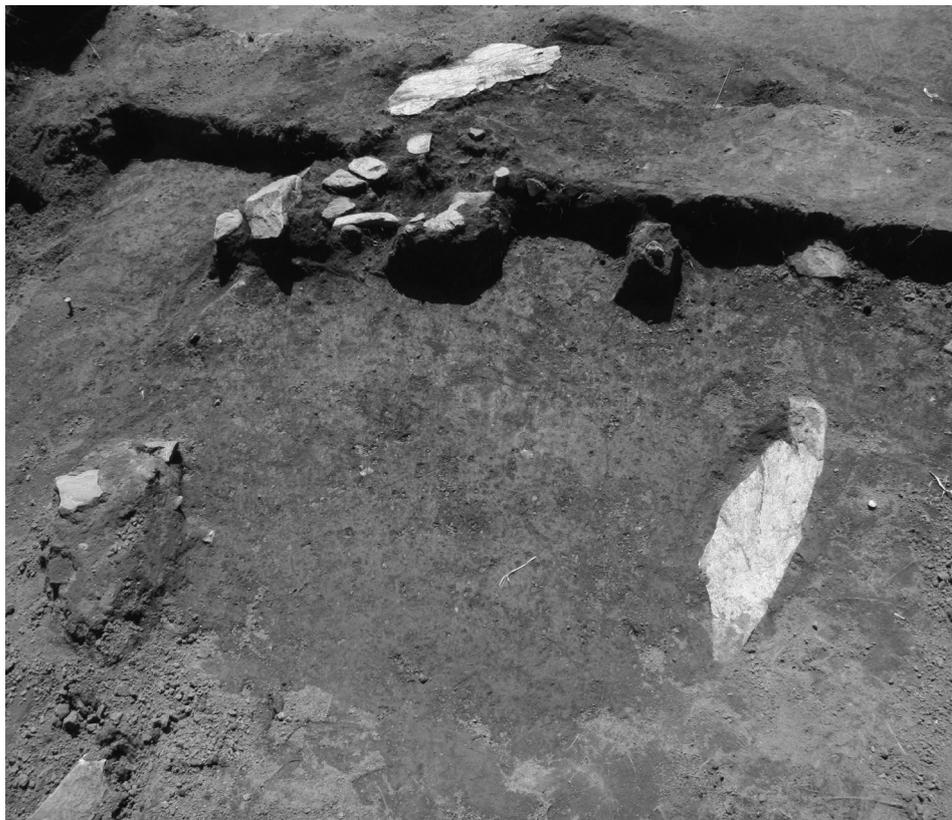


(上) 2009年度 SI-06住居 遺物出土状況(西から)

(下) 2009年度 B調査区 第2次調査トレンチ 確認面(南西から)



2010年度 SI-06住居 炉 検出状況(南西から)





2010年度 SI-01住居 床面出土土器 検出状況(北から)



(上) 2010年度 D1-D2調査区遺構検出状況(南西から)

(下) 2010年度 調査風景p(南西から)



2010年度 現地説明会(南西から)





(上) 2010年度 SI-01・SI-02 住居 遺物出土状況 (北西から)

(下) 2010年度 SI-02 住居 土層断面 (北東から)





(上) 2011年度 SI-01住居 床面出土浅鉢(北から)

(下) 2011年度 SI-02住居 埋甕(北東から)



(上) 2011年度 SI-01住居 P5 土層断面(南西から)

(下) 2011年度 SI-03住居 炉 掘り上がり(南西から)



2010年度 SI-02住居 3層上面遺物集中地点 検出状況(南から)





(上) 2011年度 SI-02住居 埋襲検出状況(北から)
(下) 2011年度 SI-02住居 埋襲(北東から)



(上) 2011年度 SI-02住居 炉 土層断面(北東から)
(下) 2011年度 SI-02住居 炉 P3 掘り上がり(南西から)



2011年度 SI-02住居 全景(南東から)





(上) 2011年度 A調査区 掘り上がり (南西から)
(下) 2011年度 A調査区 掘り上がり (北西から)

